

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— 6 —

福岡県行橋市南泉所在遺跡群の調査

竹並大内田遺跡

草場角名遺跡

2013

九州歴史資料館

序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成19年度から東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施しています。本書で報告する竹並大内田遺跡・草場角名遺跡は行橋市南部、みやこ町との市町境近くに位置する遺跡です。

竹並大内田遺跡は弥生時代集落の縁辺部に位置し、また条里地割に関わる可能性のある溝状遺構などを調査しました。草場角名遺跡は県史跡豊前国府跡に近いことから、国府関連遺跡が存在するのではないかと想定していましたが、ここも弥生時代の遺構の調査で終わりました。

本書が、地域のみならず、広く教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には西日本高速道路株式会社および関係諸機関、行橋市町・同教育委員会、そして地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成25年3月31日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県行橋市南泉に所在する竹並大内田遺跡及び草場角名遺跡の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第6集にあたる。
2. 発掘調査・報告書作製は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課（平成23年度より九州歴史資料館が継続）が実施した。
3. 竹並大内田遺跡は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第33地点、草場角名遺跡は同35地点にあたる。
4. 本書に掲載した写真は、遺構を飛野・池邊・岡田・宮田・大里が、遺物は北岡伸一が撮影したものを使用した。

なお、空中写真は東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリを使用して撮影したものである。
5. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、各担当者が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、小池の指導の下で実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「行橋・簗島・中津・田川」を改変したものである。

また、使用する座標は世界測地系による。
9. 平成23年度から、福岡県教育庁総務部文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査業務は、九州歴史資料館へ移管された。
10. 本書の執筆編集は飛野が行い、他の執筆者名は目次に記した。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織と関係者	3
II. 位置と環境	7
III. 調査の内容	11
1. 竹並大内田遺跡	11
1) 概 要	11
2) 土 坑	14
3) 溝状遺構	14
4) その他の遺構と遺物	18
5) 小 結	21
2. 草場角名遺跡	22
1) 概 要 (宮田・大里)	22
2) 1区の調査 (宮田・大里)	25
3) 2区の調査 (宮田・大里)	37
4) 3区の調査 (大里)	38
5) 小 結 (宮田)	40
IV. 終わりに	41

図版目次

竹並大内田遺跡

- 図版1 1. 全景（北西から） 2. 北半全景（西から）
3. 1号溝状遺構周辺（南から）
- 図版2 1. 南東部全景（西から） 2. 南東部全景（北から）
3. 南東部全景（南東から）
- 図版3 1. 1号土坑（北西から） 2. 1号溝状遺構（南東から）
3. 1号溝状遺構土層（南東から）
- 図版4 1. 3号溝状遺構（西から） 2. 3号溝状遺構（南西から）
3. 3号溝状遺構土層（南東から）
- 図版5 1. 3号溝状遺構土器出土状態（西から） 2. 4号溝状遺構（東から）
3. 風倒木痕土層（北東から）
- 図版6 出土遺物

草場角名遺跡

- 図版7 1. 1A区全景（上空から） 2. 1B区全景（上空から）
- 図版8 1. 1C・D区全景（上空から）
- 図版9 1. 4号土坑土層（南から） 2. 18号土坑遺物出土状態（北から）
3. 18号土坑完掘後（北から）
- 図版10 1. 15号溝状遺構（南から） 2. 15号溝状遺構土層（北から）
3. 15号溝状遺構北2区遺物出土状態（北から）
- 図版11 1. 15号溝状遺構北4区遺物出土状態（南から） 2. 15号溝状遺構礫器出土状態（北から）
3. 15号溝状遺構流木出土状態（南から）
- 図版12 1. 15号溝状遺構完掘後（北から） 2. 9号溝状遺構土層（南から）
3. 13号溝状遺構土層（西から）
- 図版13 1. 1A調査区西壁南側土層（東から） 2. 2A区磨製石斧出土状態（北から）
3. 1区出土土器
- 図版14 1. 2A区全景（上空から） 2. 2B区全景（上空から）
- 図版15 1. 3区全景（北から） 2. 3区全景（南から）
3. 3区土層（北から）
- 図版16 1. 草場角名遺跡全景（第1次調査時、南上空から）
2. 草場角名遺跡2区上空から北西方向を見る

挿図目次

	頁
第1図 東九州自動車道路線図及び調査区地点位置図 (1/100,000)	v
第2図 福岡県行橋市南泉の位置	1
第3図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)	6
竹並大内田遺跡	
第4図 竹並大内田遺跡位置図 (1/2,500)	11
第5図 竹並大内田遺跡・草場角名遺跡調査区位置図 (1/5,000)	12
第6図 竹並大内田遺跡遺構配置図 (1/400)	13
第7図 1号土坑実測図 (1/20)	14
第8図 出土遺物実測図1 (1/3)	15
第9図 溝状遺構等土層実測図 (1/40)	16
第10図 出土遺物実測図2 (2/3)	17
第11図 出土遺物実測図3 (2/3)	19
草場角名遺跡	
第12図 1区遺構配置図 (1/300)	折込
第13図 4号土坑実測図 (1/40)	25
第14図 18号土坑実測図 (1/30)	26
第15図 18号土坑出土遺物実測図1 (1/4)	27
第16図 18号土坑出土遺物実測図2 (1/4)	28
第17図 1A区西壁土層実測図 (1/40)	29
第18図 15号溝状遺構実測図1 (1/40)	30
第19図 15号溝状遺構実測図2 (1/40)	32
第20図 15号溝状遺構出土遺物実測図1 (1/4)	33
第21図 15号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)	34
第22図 23・24号溝状遺構土層実測図 (1/40)	35
第23図 1区出土遺物実測図 (1/4, 1/3)	35
第24図 2区遺構配置図 (1/300)	36
第25図 17・19号土坑実測図 (1/40)	37
第26図 SX07出土遺物実測図 (1/4)	38
第27図 3区遺構配置図 (1/300)	39
第28図 3区南壁土層実測図 (1/40)	39
第29図 国作条里地割と竹並大内田遺跡	42

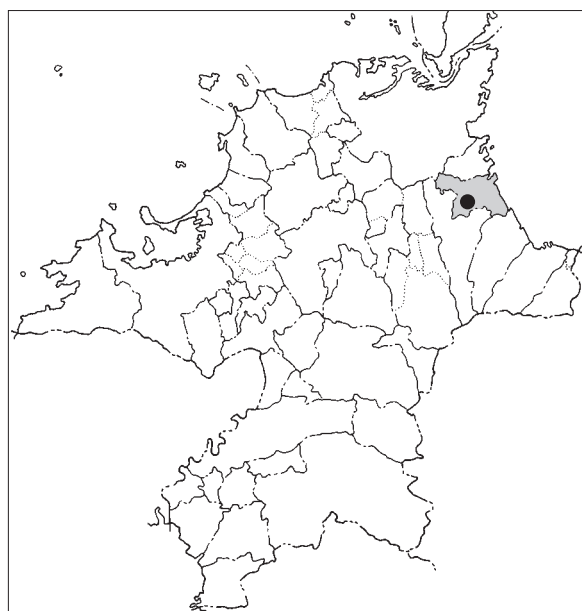


第1図 東九州自動車道路線図および調査地点位置図 (1/100,000)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

東九州自動車道は、九州縦貫自動車道小倉JCTで分岐し、東九州の主要都市を貫いて鹿児島市に至る全長436kmの高速道路である。東九州の県庁所在地である大分市・宮崎市はそれぞれ大分自動車道・宮崎自動車道によって九州縦貫自動車道に繋がるが、北九州市小倉東ICまでの距離を東九州自動車道経由の場合と比較すれば、大分市であれば約80km、宮崎市でも約40kmの短縮となる。また、九州新幹線が福岡市・鹿児島市間に開通した西回りルートに比して、東回りルートの日豊本線は福岡県全域と大分県域の一部が複線化されるのみで単線区間が多く、運行本数も多くはない。都市部と異なり、生活に占める自動車の比重が高い地域が多いことも、東九州自動車道の重要性を増大させることとなっている。



第2図 福岡県行橋市南泉の位置

東九州自動車道は、福岡県内では小倉JCTから苅田北九州空港ICまでが平成18年2月に供用されている。それに先だって、福岡県教育委員会では苅田北九州ICが設置される苅田町大字雨窪で発掘調査を実施し、『東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』-1-（雨窪遺跡群）として平成16年に報告書を刊行している。その後、道路公団が民営化されたが、それ以降の経緯について簡条書きに記す。

- ・平成17年10月1日 道路公団民営化
- ・同17年10月11日 西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と初めての協議
※17・18年度の事業計画等について
- ・同18年7月3日（18教文調第1903号）
「東九州自動車道建設予定地内の埋蔵文化財の有無について（照会）」
※東九州自動車道の計画平面図を提示、各種開発で蓄積したデータの集約を関係市町へ依頼
- ・同18年9月21日
※上記のデータ集約作業終了。11月13日に関係市町村へ配布。それ以前に西日本高速・県土部（当時）高速道路対策室にも手交。福岡工事事務所管内で43地点、仲津工事事務所管内で50地点を登録する。
- ・同19年3月26日

表1 東九州自動車道中津工事事務所管内調査地点一覧

地点	工事件名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備考
0	苅田IC	雨窪遺跡群	京都郡苅田町大字雨窪		H12・13	4000	H13・14	H15	1集	
1	福岡		京都郡苅田町大字雨窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都郡苅田町大字提	4500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字提・馬場	13100	H16・20・21	1200		H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都郡苅田町大字馬場・南原	35300	H18・19	3900	H19・20	H24	4集	
5	福岡		京都郡苅田町大字集	32100	H21・22					遺跡なし
6	福岡		京都郡苅田町大字下片島	30600	H18・20・21					
7	福岡		京都郡苅田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	24200	H20～22	5000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都郡苅田町大字上片島	29600	H20～22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都郡苅田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21～23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都郡苅田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19～23	H23～	2集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18・19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20・22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21・22			
25	福岡	宝山桑ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20・21	31550	H22～			
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20・21	2900	H22			
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18590	H20	12750	H21～23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20・22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原寄原遺跡	行橋市南泉	18774	H19・22	16574	H22～			
31	福岡	福原寄原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21			
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21・22	13888				H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20・21	4560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場角名遺跡 国作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町国作	42940	H20～22	3420	H22・23	H24	6集	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ辻遺跡	京都郡みやこ町国作・田中・有久	29491	H20～22	29491	H21～23			H21八反田遺跡はみやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	皆見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町皆見	1132	H21	1132	H22			
39	福岡	皆見中園遺跡 皆見大塚古墳	京都郡みやこ町皆見	8218	H21・22	5918	H21～23			H22皆見中園遺跡はみやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 八ッ重遺跡	京都郡みやこ町皆見・下原	45510	H19～21	22763	H20～22	H23～	3集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町皆見	5080	H21	3580	H21・22			
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21・22	26000	H22			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					

「東九州自動車道（苅田北九州空港IC～行橋IC間）埋蔵文化財発掘調査協定書」を交わす。

苅田町岩屋古墳群で最初の調査に着手。

・同20年4月22日

「東九州自動車道（行橋IC～豊津IC間）埋蔵文化財発掘調査協定書」を交わす。

この区間での最初の発掘は豊津IC内のカワラケ田遺跡で、着手は同年10月3日であった。

本書で報告する竹並大内田遺跡・草場角名遺跡は行橋市南泉に位置するが、町名変更以前はそれぞれ大字竹並・同草場に属したことから遺跡名に冠している。

竹並大内田遺跡周辺は平成2・3年度に圃場整備事業が施工され、それに伴って鬼熊遺跡が発掘調査された。報告書によれば、約3,000㎡の調査区内で弥生前期～中期の竪穴住居跡・貯蔵穴、弥生後期および古墳後期の竪穴住居跡の他掘立柱建物跡や土坑・溝などが密に検出され、出土品にも旧石器や縄文陶質土器といった注目すべきものがあった。今回の調査区はその鬼熊遺跡の北西300mの付近に位置することから、関連する遺跡の所在が推測された。平成21年2月18～20日にかけて周辺の試掘・確認調査を実施、その結果、溝や土坑と思われる遺構を確認したことから今回の調査対象地を決定した。

草場角名遺跡はみやこ町との市町境に近く位置する。この付近は宅地が増えてきたものの、その間の道路は100m余の間隔をもって格子状に設置されている。これは条里地割を踏襲したため、付近は条里地割が良好に残っている地域とされていた。この地点の試掘調査は平成21年12月14～16日に実施した。その結果、報告する3筆の水田で溝・土坑・柱穴などを検出、調査対象地を決定したものである。この500mほど南、みやこ町国作には県指定史跡豊前国府跡が所在し、政庁跡が整備されて公園となっている。東九州自動車道は県史跡豊前国府跡の近くを通るため、関連する重要遺跡が発見された場合、処置に苦慮することが予想されたが、幸いなことに豊前国府跡周辺ではそうした事態には至らなかった。

各遺跡の調査経過は各報告によらるたい。

2. 調査の組織と関係者

ここで報告する2遺跡の発掘調査は平成21年度から23年度にかけて行い、整理・報告書作成作業は同24年度に行った。この間の西日本高速道路株式会社関係者は以下の通り。

	21年度	22年度	23年度	24年度
西日本高速道路株式会社九州支社				
支社長	久保晶紀	久保晶紀 (～9.30) 本間清輔	本間清輔	本間清輔
同福岡工事事務所				
所長	福田美文	福田美文	中藺明広	源谷秋義
副所長 (技術担当)	高尾英治 (～9.30) 岩尾 泉	岩尾 泉 (～9.30) 入江壮太	入江壮太 今井栄蔵 (～9.30) 井 秀和 (10.1～)	松繁浩二 井 秀和

	21年度	22年度	23年度	24年度
副所長 (事務担当)	原野安博	原野安博	原野安博	原野安博 (用地課長兼務)
総務係長	白川雄二 (~9.30) 江口政秋	江口政秋	江口政秋	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	桑原和之 (~5.10) 原野安博
工務課長	大久保良和 (~9.30) 石塚 純 (10.1~)	石塚 純	石塚 純 (~9.30) 豎山哲二 (10.1~)	豎山哲二
行橋南工事長	杉本浩司	杉本浩司	榎本敬二	榎本敬二

また、発掘調査にかかる福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。なお、平成23年度に福岡県教育委員会は組織を改編して、文化財保護課の埋蔵文化財発掘調査部門を九州歴史資料館文化財調査室へ移管した。

福岡県教育委員会

総括

教育長	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	荒巻俊彦
総務部長	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長	池邊元明	伊崎俊秋		
参事	小池史哲 (課長技術補佐)	小池史哲 (課長技術補佐)		
	伊崎俊秋 (課長技術補佐)			
課長補佐	前原俊史	日高公德		
調査第一係長	小田和利	吉村靖徳		

庶務

管理係長	富永育夫	富永育夫		
庶務担当	野田 雅	仲野洋輔		

調査

参事補佐	飛野博文 (調査第二係長)	飛野博文 (調査第二係長)		
技師	岡田 諭			
臨時調査員		宮田 剛		

九州歴史資料館

総括

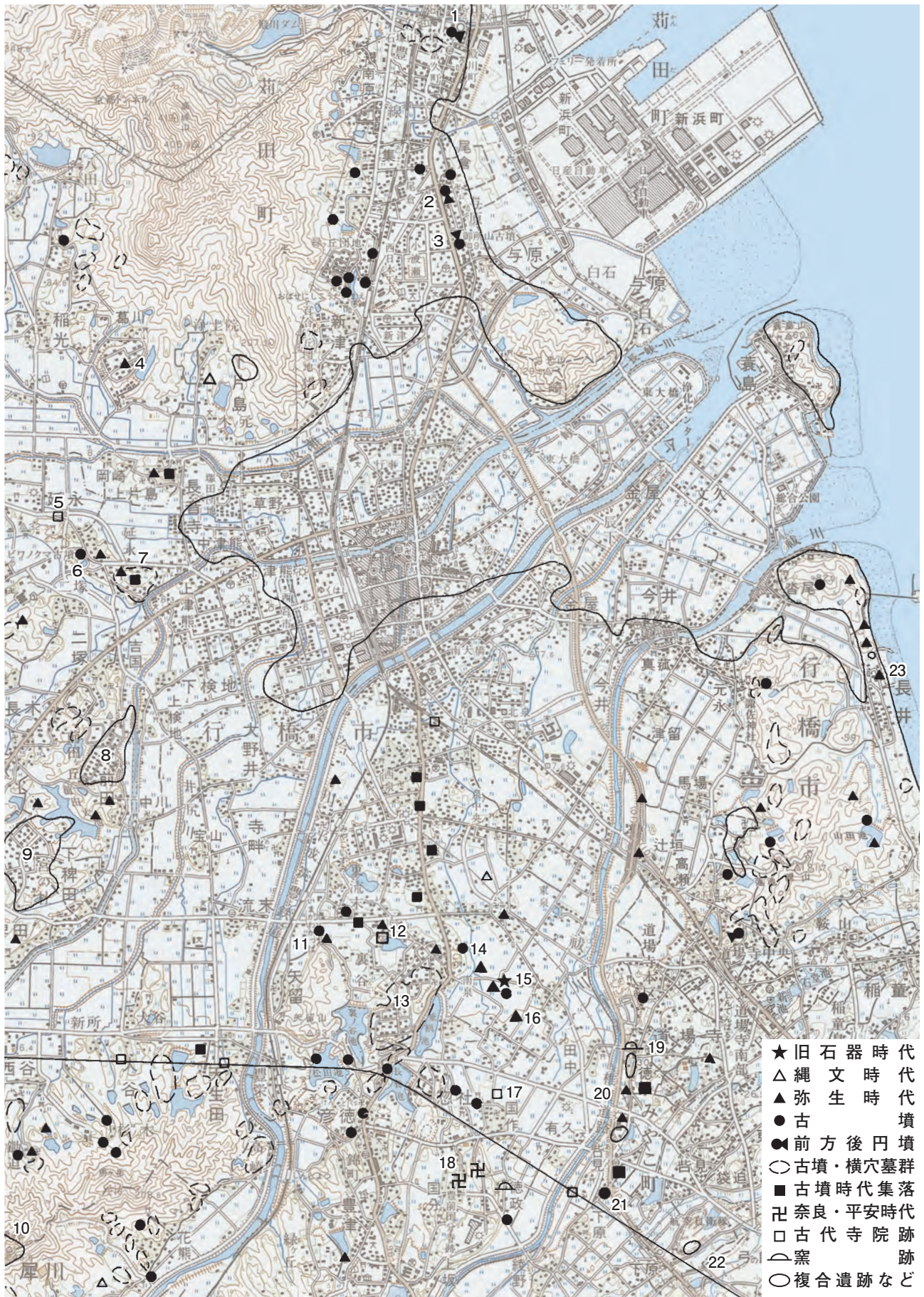
館長		西谷 正	西谷 正
副館長		南里正美	篠田隆行
企画主幹 (総務室長)		圓城寺紀子	圓城寺紀子
企画主幹 (文化財調査室長)		飛野博文	飛野博文

	21年度	22年度	23年度	24年度
企画主幹	(文化財調査室長補佐)		吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査	(文化財調査班長)		小川泰樹	小川泰樹
庶務				
企画主査			塩塚孝憲	長野良博
事務主査				青木三保
主任主事			熊谷泰容	
同			近藤一崇	近藤一崇
主事			谷川賢治	谷川賢治
調査				
参事補佐			池邊元明	
臨時調査員			大里弥生	
整理報告				
技術主査	(保存管理班長)			加藤和歳
同参事補佐				池邊元明
同				小池史哲
技師				小林 啓
臨時調査員				宮田 剛
同				大里弥生

なお、発掘調査にあたっては、福岡県県土整備部高速道路対策室、行橋市役所（高速道路対策室他）および行橋市教育委員会、工事関係者、そして地元有志および調査地に隣接する方々の大きな御協力を得て、無事に発掘調査を終了することができた。記して謝意を表します。



工事が進む東九州自動車道（草場角名遺跡付近）
背後の山岳は彦彦山・犬ヶ岳



1. 石塚山古墳 2. 番塚古墳 3. 御所山古墳 4. 葛川遺跡 5. 延永水取遺跡 6. ビワノクマ古墳 7. 延永ヤヨミ園遺跡 8. 前田山遺跡 9. 下柳田遺跡
 10. 御所ヶ谷神籠石 11. 矢留堂ノ前遺跡 12. 福原長者原遺跡 13. 竹並遺跡 14. 竹並大内田遺跡 15. 鬼熊遺跡 16. 草場角名遺跡 17. 豊前国府跡
 18. 豊前国分寺 19. 徳永居屋敷竈跡 20. 徳永川ノ上遺跡 21. 皆見大塚古墳 22. 古代官道 23. 長井遺跡

第3図 周辺遺跡分布地図 (1/50,000)

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

ここで報告する2遺跡は、福岡県行橋市南泉の水田地帯に所在する。なお、「南泉」は比較的新しく町名変更がなされたもので、いくつかの旧大字を含んでいる。遺跡名は旧大字・小字を用いた。

行橋市は旧京都郡・旧仲津郡が明治29年に再編されて成立した京都郡の中心都市である。東は瀬戸内海（周防灘）に面し、他の三方は北九州市、京都郡苅田町・みやこ町、築上郡築上町に囲まれている。地形から見ると、北はカルスト地形の平尾台上に北九州市境があり、西はみやこ町（旧勝山町）に接し、その背後の標高573mの大坂山から平尾台へ続く山並みを田川郡との境とする。南は築上郡築上町・みやこ町（旧豊津町）に接し、さらに南は北部九州の修験道の一大拠点、標高1200mの英彦山に連なる山並みが大分県との境をなす。築上郡築上町付近ではヤツデ状に無数の山並みが周防灘へ延びていて、行橋市付近は瀬戸内海に面した盆地状の地形となる。

市内では長峽川・今川・祓川といった2級河川が周防灘に注ぐが、それらの河口付近はいずれも近世以降の干拓地で、現在では陸続きとなっている箕島は文字通りの島であった。昭和52年の大水害では標高5m付近まで冠水、市街地の大部分が水没した。その際の水没ラインを参考に古墳時代～古代の海岸線が標高5mの等高線付近で想定されている。想定された海岸線については、試掘調査等の積み重ねの中で確定・修正されていくことであろう。

行橋市街地の大部分は上記河川によって形成された三角州・海岸平野であるが、その周辺部は低位段丘・丘陵や河川に沿う扇状地からなっている。低位段丘・丘陵は主として集落（宅地）が位置し、扇状地は集落および水田化している。今回報告する2遺跡は、祓川左岸に広がる扇状地に位置する^{註1}。

2. 歴史的環境

福岡県東部から大分県北部は明治以前は豊前国と呼ばれ、企救・田河・京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の8郡からなっていたが、明治29年（1896）に京都・仲津は京都郡、築城・上毛は築上郡に再編されて現在に至る。今日では、北九州市域を除く福岡県域の「豊前」を京築地区と称している。10世紀前半に編纂された『和名抄』の郷名を現在地へ厳密に比定できないことや、主要河川の流路の変動もあるために郡成立時の京都・仲津郡境ははっきりしない。当時から変わらないと想定できる郡境は旧勝山町・犀川町の境、すなわち大坂山から馬ヶ岳に至る山塊の尾根線で、南は仲津郡、北が京都郡である。二級河川今川がその先端をかすめて北流し、以北では今川左岸の一部と右岸が仲津郡、左岸の大部分が京都郡となることから、この今川がその境とされたと思われる。もちろん当時の正確な流路は不明である。

さて、この地域で最も古いヒトの痕跡は、周防灘沿岸の海岸段丘上で最もまとまって発見されている。行橋市渡築紫遺跡C区で、火山灰層から尖頭状石器・台形様石器や削器など珪質岩系の石材を使用した後期旧石器時代の出土品があり、地域で最も遡るとされている^{註2}。そのほかにも市

内各所で散発的にナイフ形石器や削器などが出土するが、採集あるいは混入である。ただ、広範に出土することから、当時、既に京築地域で広範に人々が生活していたことが窺える。

縄文時代最古の土器は平野最深部、標高210mの山間の地、みやこ町上伊良原榎遺跡^{註3}で発見された早期柏原式土器で、ここは前期押型文土器の時期までの遺跡である。標高140m付近の築上郡本庄大坪遺跡でも出土するというが、標高20mほどの北九州市小倉南区貫丸尾遺跡でも出土していて山間地に限定するというものではない。押型文土器は出土例が多くなるが、まだ遺構ははっきりしない。この地域で住居跡が一般的となるのは後期になってからである。みやこ町節丸西遺跡^{註4}、築上町石町遺跡^{註5}、山崎遺跡^{註6}など、中小の河川に接して集落が調査されている。

弥生時代になると海岸砂丘上の行橋市長井遺跡^{註7}で墓地に伴って板付Ⅰ式土器が夜臼式土器などとともに採集されているが、発掘調査を経たものではない。その後、標高12m前後の市内辻垣地区の遺跡でも流路から同様の土器が出土したものの、遺構ははっきりしないままであった^{註8}。明瞭な遺構は板付Ⅱ式に比定される京都郡菟田町葛川遺跡^{註9}で発見された環濠が最古とって良い。平尾台の東に連なる高城山系の南麓、丘陵上にあつて、環濠は長軸約60m、短軸45mほどの楕円形に近い形状をなし、溝は最大幅2.6m、深さは最深部で1.9mを測る。その後、竹並遺跡^{註10}や前田山遺跡^{註11}、下稗田遺跡^{註12}（いずれも市内）など大規模開発に伴って調査を行った丘陵上の遺跡、各地で行われた圃場整備事業に伴って前期以降の平地の集落・墓地の調査が相次いだ。先の丘陵上の遺跡では環濠は見られず、市内で確実な環濠集落は、この東九州自動車道建設に伴う矢留堂ノ前遺跡の調査で初めて明らかとなった。詳細は26年度報告の予定である。圃場整備事業に伴って調査された遺跡はまだ多くが整理段階であるが、報告された遺跡では標高18mの水田下で見つかった鬼熊遺跡^{註13}の貯蔵穴のあり方が注目される。各種遺構のうち、弥生前期後葉から中期前葉にかけての竪穴式住居跡3基と貯蔵穴57基が調査されたが、その47基が住居跡と40mほどの距離をもって集中して掘削されていて、集団で管理していた様を思わせる配置となっている。市内下崎ヒガンデ遺跡^{註14}でも中期後半の竪穴式住居跡7基、貯蔵穴38基などが調査されたが、そのうちの20基は集落の端に集中していて同様な様相を見せていた。

この周防灘沿岸地域は成人用甕棺が用いられなかった地域で、前期以来土壙墓・石蓋土壙墓・木棺墓・石棺墓が用いられた。ただし、日常土器を使用した小児用甕棺は普通に見られる。甕棺墓のように細かな時期比定は難しいが、大雑把に中期までは列埋葬が、終末期近くには墳丘墓を想定できる遺跡もある。この地域で特筆すべき弥生墓は上毛町大塚本遺跡^{註15}とみやこ町徳永川ノ上遺跡^{註16}である。大塚本遺跡は本格的な墳丘墓で、周溝内法で14×16mの規模をもち、内部は荒らされていて5基の小型の埋葬施設が確認できただけで、副葬品は出土しなかった。また、墳丘墓外では列埋葬も見られた。川ノ上遺跡は弥生時代終末から古墳時代初めにかけての変遷が見て取れるとともに、破鏡を含む舶載鏡5面、素環頭刀子・剣・鏃などの鉄製品、玉類などの副葬品が域内では他を圧して豊富である。

古墳時代を代表する遺跡、前方後円墳は菟田町の海岸線近くに大規模なものが造られる。三角縁神獣鏡14面を出土したといわれる石塚山古墳^{註17}（全長110m）は学史に名高い。また、石障を配置した初期の横穴式石室をもつ御所山古墳^{註18}（同118m）も豊前地方では特異な大規模墳である。御所山古墳の北に近接する番塚古墳^{註19}（同50m）は、破壊される際に九州大学による調査がなされて豊富な遺物を出土し、石室だけが保存されている。小規模な前期古墳は竹並遺跡や菟田町天疫神社古墳群^{註20}などで方形墳として現れる。

5世紀代では、同じく海岸線であっても番塚古墳などから7kmほどを隔てた行橋市稲童海岸に石並古墳を中心として小古墳を含む24基の古墳が分散して群をなす^{註21}。5世紀代の盟主墳である石並古墳は円丘部が直径58m、作出部の幅20m、6mの間隔を置いて幅6mの周溝を2重に巡らせている。この古墳からの出土品は埴輪以外に知られていないが、直径20m前後の8・21号墳からは銅鏡・甲冑・馬具などといった豊富な遺物が出土した。6世紀代の古墳は急激に小型化するという。

海岸線に近い荊田町市街地南西部の山麓にも5世紀代からの小古墳が多く造られ、一方、最奥部の平尾台南麓からみやこ町勝山地区・犀川地区では6世紀後半以降の小古墳が非常に多く見られる。6世紀以降の前方後円墳は、みやこ町勝山地区及び行橋市内でも勝山地区に近い付近が最有力となる。行橋市八雷古墳^{註22}（同80m）・みやこ町扇八幡古墳（同58m）・同箕田丸山古墳（同40m）・同庄屋塚古墳（同90m）などである。引き続き勝山地区に大型円墳綾塚古墳・大型方墳橋塚古墳（いずれも墳長40mほど）が造営され、旧京都郡域の最後の首長墳となる。同じ頃、仲津郡でもみやこ町豊津地区に彦徳甲塚古墳（円墳、30m）や甲塚方墳（36×46m）が造営され、仲津郡域の最後の首長墳である。京都郡域のような有力な前方後円墳の系譜が辿れないこともあり、仲津郡域でこのような突出した古墳が造られる背景はまだよく分からない。

県指定史跡豊前国府跡^{註23}は草場角名遺跡の南500mほど、総社八幡宮に隣接して位置し、整備・公園化されている。『和名抄』等の古記録ではいずれも国府は「京都郡」にあると記されるが、この豊前国府跡は史跡豊前国分寺^{註24}とともに旧仲津郡にあつて移転説、誤記説などが論じられてきた。今回の東九州自動車道建設に伴う調査によって、行橋市福原長者原遺跡で国府としか考えられない大規模な官衙遺跡が発見された。文字といった直接的な証左はないが、様々な状況からこれが初期の豊前国府であった可能性は高いといえるが、この地も仲津郡に属する。また、草場角名遺跡の北東600m付近に草場神社がある。この神社はかつて豊日別神社という社名をもち、宇佐宮への勅使が立ち寄ったという仲津郡衙の推定地の一つである。豊前国内では上毛町で大ノ瀬官衙遺跡^{註25}（上毛郡衙郡庁院）、大分県中津市で長者屋敷遺跡^{註26}（下毛郡衙正倉院）が国史跡となっているが、他の郡では不明である。上毛郡では大ノ瀬官衙遺跡より古相を示す官衙的遺跡も発見されていて、遺跡から郡衙の成立に迫りうる資料といえよう。

また、この地域は大宰府・宇佐と並んで古代寺院が盛行した。行橋市椿市廃寺^{註27}（旧京都郡）、みやこ町豊津上坂廃寺^{註28}・みやこ町犀川木山廃寺^{註29}（ともに旧仲津郡）などが7世紀末の創建とされ、8世紀にはみやこ町豊津豊前国分寺（旧仲津郡）、8世紀末にはみやこ町勝山菩提廃寺^{註30}（旧京都郡）の存在が知られている。木山廃寺は雄大な石積の門で知られる御所ヶ谷神籠石^{註31}の南麓に位置している。佐賀県基山と同じく、本来は「城山」であろう。ただ、この地域の古代寺院はいずれも保存状態が悪く、伽藍配置のすべてをを確認した例はない。

註1 太田正道「第一編自然・地理 第三章地形」（行橋市史編纂委員会『行橋市史 上巻』2004）

2 吉留秀敏「京都平野のあけぼの」（行橋市史編纂委員会『行橋市史 上巻』2004）

3 福岡県教育委員会「伊良原Ⅱ」（『福岡県文化財調査報告書』第229集上巻、2011）

4 豊津町教育委員会「豊前国府および節丸西遺跡」（『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990）

5 椎田町教育委員会「石町遺跡」（『椎田町文化財調査報告書』第2集、1988）

6 福岡県教育委員会「山崎遺跡（Ⅰ）付 石町遺跡」（『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』7上巻、1992）

7 定村責二・小田富士雄「福岡県長井遺跡の弥生土器」（『九州考古学』25・26号、1965）

- 8 福岡県教育委員会「辻垣ヲサマル遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集、1993）
福岡県教育委員会「辻垣畠田・長通遺跡」（『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1994）
- 9 苅田町教育委員会「葛川遺跡」（『苅田町文化財調査報告書』第3集、1984）
- 10 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』、1979
- 11 行橋市教育委員会「前田山遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987）
- 12 行橋市教育委員会「下稗田遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第17集、1985）
- 13 行橋市教育委員会「鬼熊遺跡」（『行橋市文化財調査報告書』第27集、1999）
行橋市教育委員会「鬼熊遺跡2 - 第2次発掘調査報告書 -」（『行橋市文化財調査報告書』第45集、2012）
- 14 辛嶋智恵子「下崎ヒガンデ遺跡」（行橋市史編纂委員会『行橋市史 資料編 原始・古代』2006）
- 15 福岡県教育委員会「大塚本遺跡」（『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第9集、1998）
- 16 福岡県教育委員会「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」（『一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1996）
- 17 苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」（『苅田町文化財調査報告書』第9集、1988）
- 18 苅田町教育委員会「史跡御所山古墳保存管理計画策定報告書」、1976
- 19 苅田町教育委員会・九州大学考古学研究室「番塚古墳」（『苅田町文化財調査報告書』第20集、1993）
- 20 苅田町教育委員会「松蔭天疫神社古墳群」（『苅田町文化財調査報告書』第10集、1988）
- 21 行橋市教育委員会『稲童古墳群』、2005
- 22 行橋市教育委員会「八雷古墳」（『行橋市文化財調査報告書』第14集、1984）
その他、市内および周辺古墳については上掲、『行橋市史 資料編 原始・古代』に簡潔に紹介されている。
- 23 調査概報が数冊刊行されているが、町史にまとめられている。
豊津町史編纂委員会『豊津町史』上巻、1997
- 24 豊津町教育委員会「史跡豊前国分寺跡発掘調査及び環境整備事業実施報告書」（『豊津町文化財調査報告書』第16集、1995）
- 25 新吉富村教育委員会『史跡大ノ瀬官衙遺跡保存整備基本計画』、2000
- 26 中津市教育委員会「長者屋敷遺跡」（『中津市文化財調査報告書』第26集、2001）
- 27 行橋市教育委員会「椿市廃寺Ⅱ」（『行橋市文化財調査報告書』第24集、1996）
- 28 犀川町教育委員会『木山廃寺跡』、1975
- 29 酒井仁夫・高橋章「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」（『九州考古学』第59号、1984）
- 30 勝山町教育委員会「菩提廃寺」（『勝山町文化財調査報告書』第2集、1987）
福岡県教育委員会「菩提遺跡」（『一般国道201号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告』1、2003）
福岡県教育委員会「菩提遺跡Ⅱ」（『一般国道201号仲哀改良工事関係埋蔵文化財調査報告』2、2007）
- 31 行橋市教育委員会「史跡御所ヶ谷神籠石発掘調査概要報告書」（『行橋市文化財調査報告書』第26集、1998）

Ⅲ. 調査の内容

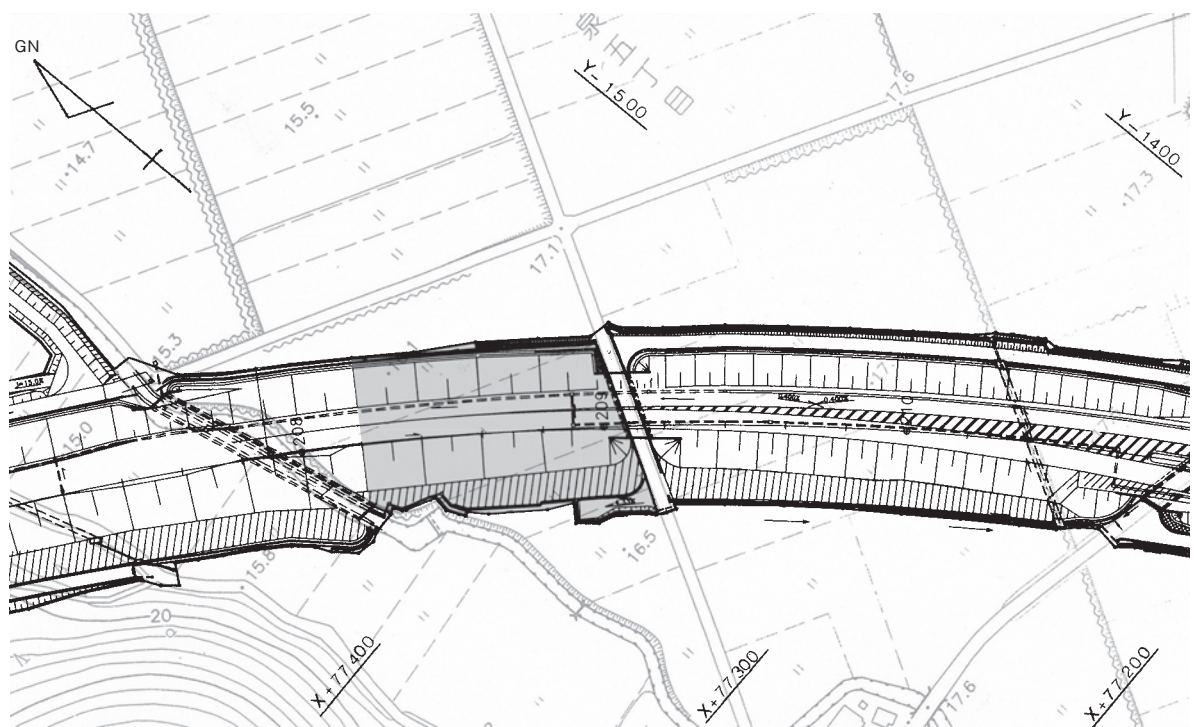
1. 竹並大内田遺跡

1) 概 要

この調査対象地は福岡工事事務所第33地点で、現状は圃場整備が施工された水田である。東側の第34地点とともに平成3年度に圃場整備事業に伴って調査された鬼熊遺跡に近いことから、遺跡の存在が推測されていた。

平成21（2009）年2月18～20日にかけて、第33・34地点の試掘・確認調査を実施した。第34地点は鬼熊遺跡を含む地点で、ほぼ15,000㎡にわたって遺跡の存在が確認された。第33地点は中央に農道を挟む延長300m近い水田であったが、東半では良好な地山を検出したものの遺構・遺物を確認できず、圃場整備施工時に削平されたものと推測された。農道の西側では、その東よった付近で柱穴や溝を確認し、西端の江尻川に向かって地形が下降する様子が窺えたが、農道と江尻川間の6,500㎡を本調査対象地に設定した。

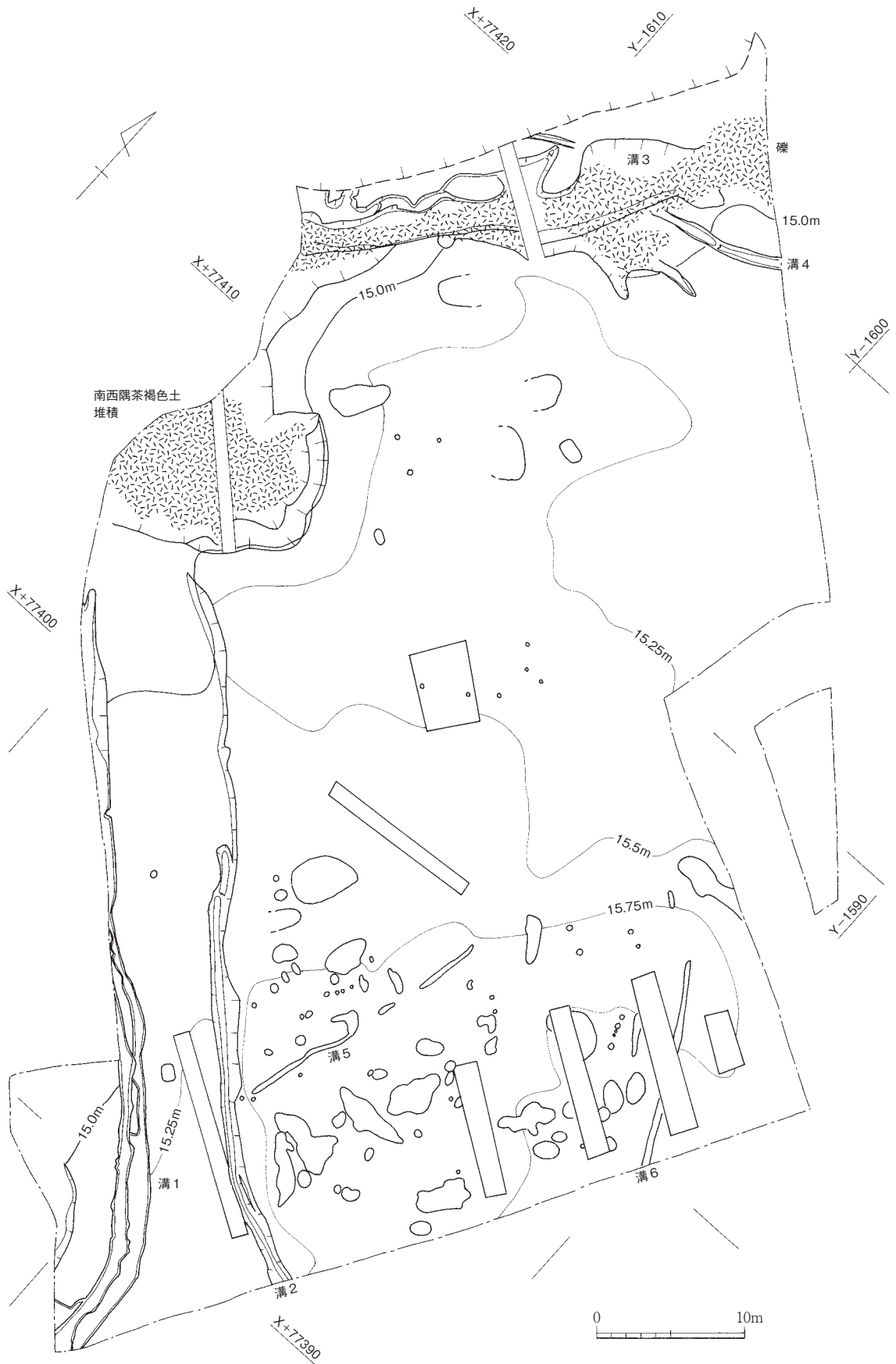
発掘調査は平成21年9月24日から重機を使用して表土掘削を開始した。表土掘削の過程で、中央付近やや西寄りに至ると段落ちとなり、以西は砂利層を基盤としていたことから表土掘削はそのラインで終えた。なお、調査対象地内の東端を造成して駐車場等のヤードとして使用したために、その部分の調査を最後に行った。当初表土掘削した部分の調査を終え、駐車場部分の表土掘削を前にした12月1日に調査担当を交代、12月24日に人力での作業を終了した。最終的に埋め戻しが終了したのは年末も押し迫った12月27日であった。



第4図 竹並大内田遺跡位置図（1/2,500）



第5図 竹並大内田遺跡・草場角名遺跡調査区位置図 (1/5,000)

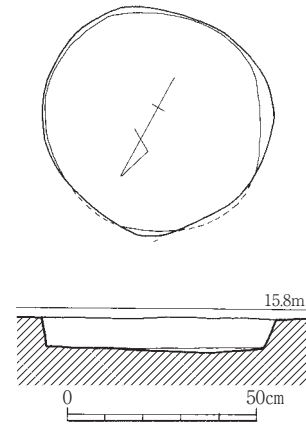


第6図 竹並大内田遺跡遺構配置図 (1/400)

2) 土坑 (図版3、第7図)

調査区南東隅付近で1基のみを検出した。直径1.2mと小型で、深さも0.15mが残存するだけである。埋土は灰黒色を呈し、分層は困難であった。

出土遺物 (第8図1・2) 弥生前期の土器が若干出土したが、図示に堪えるものは次の2点である。1は甕の小片で、頸部下に篋描き沈線と刺突文で構成された文様帯が残る。外面は黒色となり、胎土は粗い。2は底部片で、1/2近くが残存する。外面は熱を受けて赤く変色し、非常に荒れているがかすかに刷毛目のような痕跡が一部に見える。内面は暗褐色となり、あまり荒れてはいない。これも胎土が粗く、1～3mmほどの石英粒が非常に多く器表に浮く。



第7図 1号土坑実測図
(1/20)

3) 溝状遺構

1号溝状遺構 (図版3、第6・9図)

調査区南東隅から南西辺に沿って走る小規模な溝で、2条が重複するようである。北側の溝は浅く、床面が不整となる。南側の溝は幅0.9m、深さは北側の溝に比してやや深いものの0.2m弱であった。埋土は灰白色の細砂と灰白色粘質土が互層となり、最下層には灰黒色粘質土が堆積していた。

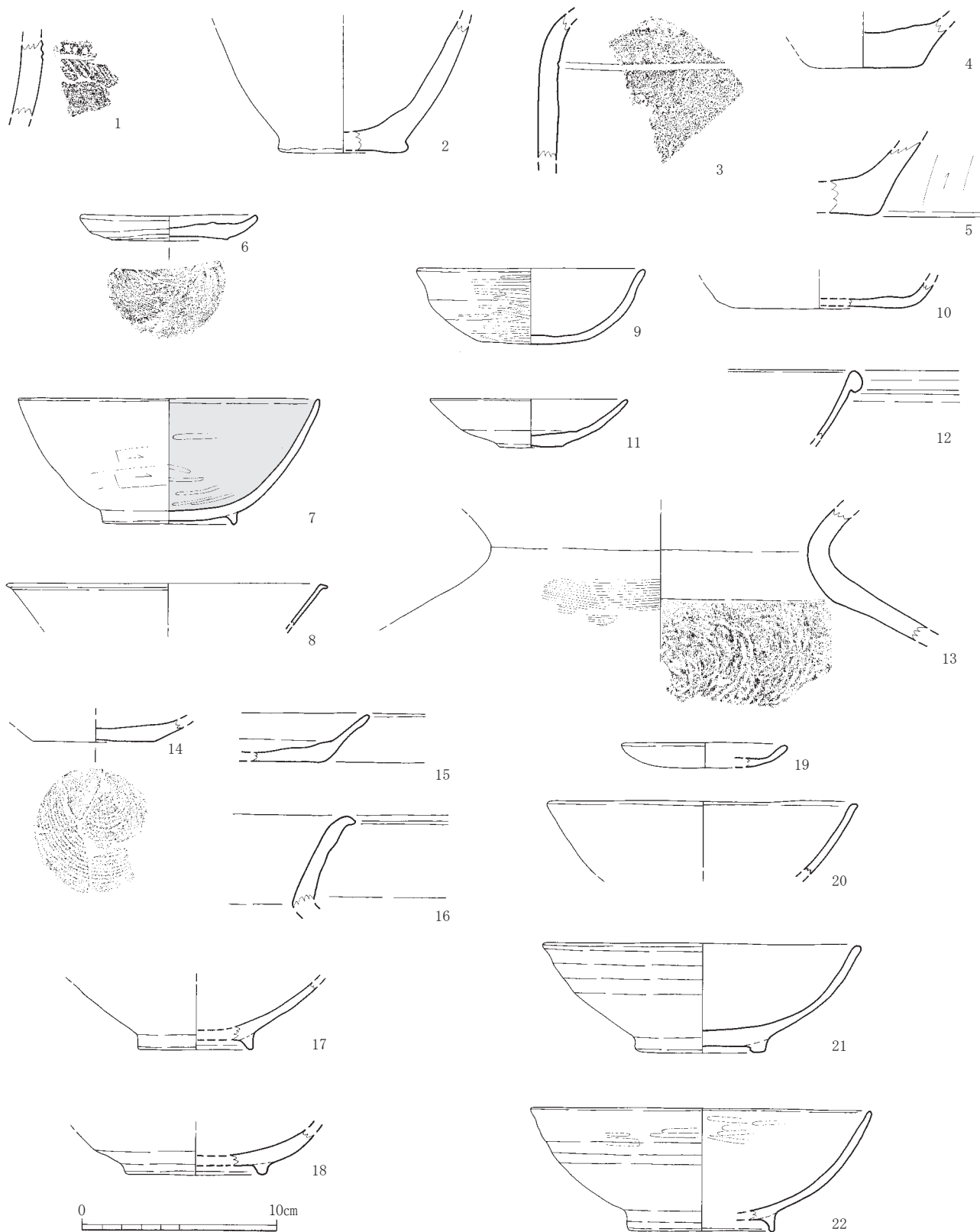
出土遺物 (第8図4～8) 4・5は弥生前期壺の底部片。小片であるが、今回調査した貯蔵穴以外の遺構の存在したことを視わせる資料として図示した。

6は土器器皿で、1/2強が残存する。復原口径9.2cm、器高は1.3cmを測る。体部外面中位を強く横撫でして、3つの部位に分けたようになる。内底面では横撫でによる凹凸が著しい。胎土は非常に精良であるが、意図的に混入したものか、茶褐色のクサリ礫状の砂粒が目立つ。7は外面・器肉が灰白色に近く、内面が黒色となる土器で、高台付近は完存する。体部下半は丸みをもつが、上半はほぼ直線的に伸びて、端部は丸く終わる。内面には幅広い暗文風の篋磨きが見え、器表の遺存状態がよい部分では密に施しているようである。外面は器表が荒れているが、横位の篋削りの痕跡および粘土紐の巻き上げ痕が見える。断面三角形の高台は貼り付けで、高台内はほぼ全体を横撫でで仕上げるようである。胎土は精良。8は口端部を折り曲げてほぼ水平な面とする白磁片。

2号溝状遺構 (第5図)

1号土坑南に、1号溝状遺構と同じような方向で掘削された溝で、埋土の状況や出土遺物から非常に新しいもので、圃場整備前に使用されていた水路と判断した。

なお、この溝を境に南東端では0.4mの段差がある。北東の高い部分では黄褐色土が地山であるが、南西の低い部分では粘土質の地山となっている。



第8図 出土遺物実測図1 (1/3)

3号溝状遺構（図版1・4・5、第6・9図）

調査区北西の端は段落ちとなる部分で止めているが、その付近で検出した溝状遺構である。両肩ともに乱れが大きい。

中央付近に設定した土層では、黄褐色土の地山に幅3m弱の規模で掘り込まれ、深さは最大で0.6mほどとなる。床面は多くが礫に覆われ、東側では礫を覆う砂層も見られる。礫上はほぼ粘質土が堆積している。

北半では形状がより乱れ、礫の分布範囲が広まっている。また、この付近では2、3条の小規模な溝状遺構とも重複しているが、土質のため先後関係は確認できなかった。

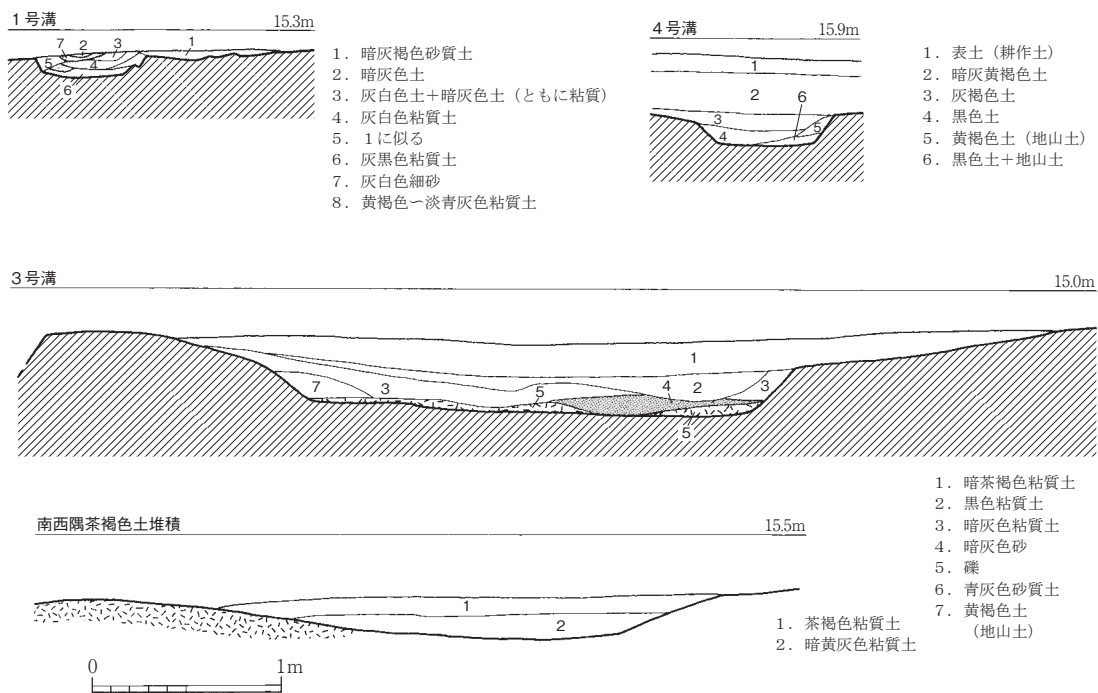
出土遺物（第8図3・9～13）3は弥生土器甕の小片。頸部下に篋描沈線が1条巡る。

9は土師器で、1/3ほどが残存する。底部が丸く、口縁部付近を緩く外反させている。器表が荒れているが、外面は全体を篋磨きで仕上げるようである。微砂粒を含むが、胎土も精良といってよい。10は須恵器杯の底部片で、1/4ほどが残存する。焼成が甘く、器表も荒れている。11は白磁皿で、底部は完存。小さな平底から、内彎して開く浅い体部を持ち、外底面を除いた全面に白濁した黄味を帯びた釉を施す。外底面の調整痕は不明で、見込みには圈線を刻む。12は白磁の玉縁口縁の小片。

13は明るい灰黄褐色を呈する土師器甕片で、北端付近の礫上から多くの小片が出土したが、接合し得なかったため頸部付近を図示した。外面はカキ目、内面には同心円文が残るが、全体に器表が荒れている。焼成不良というよりは土師質に焼き上げたというほうが近い。

4号溝状遺構（図版5、第8図）

3号溝状遺構の北東にあり、同遺構と斜交する方位をもつ。調査区境での土層観察によれば、深さ0.3m弱、幅は1m弱で黒色系～暗褐色系の埋土をもつ。なお、3号溝状遺構を挟んでこの溝の延長と思われる小溝があった。出土遺物はない。



第9図 溝状遺構等土層実測図（1/40）



第10図 出土遺物実測図2 (2/3)

4) その他の遺構と遺物

今回の調査対象地は黄褐色土を地山とする遺跡が立地するには適した地形と思われたが、柱穴もほとんど確認できなかった。長い間の開墾や圃場整備事業によって失われたものが多いのではないかと考えている。一方で、ほぼ全面にいわゆる風倒木根がみられた。不正円形に近い平面形、外周に黒色系土が入り、中央付近により深い部分の土－明るく粒度が粗い－が現れることが一般的である。これらからの出土遺物は非常に乏しく、また時期を推測させるようなものはない。後述する石製品等は溝などから出土したものである。

「南辺沿い落込み」出土遺物（第8図14～18）

調査区南西辺に沿って、茶褐色土が連続して堆積していた。1号溝状遺構東端西南の拡張した部分では南へ向かって地山が下降していたので、この茶褐色土は1号溝状遺構の延長あるいは南へ向かって下降する地形の上に堆積した包含層であるかもしれない。

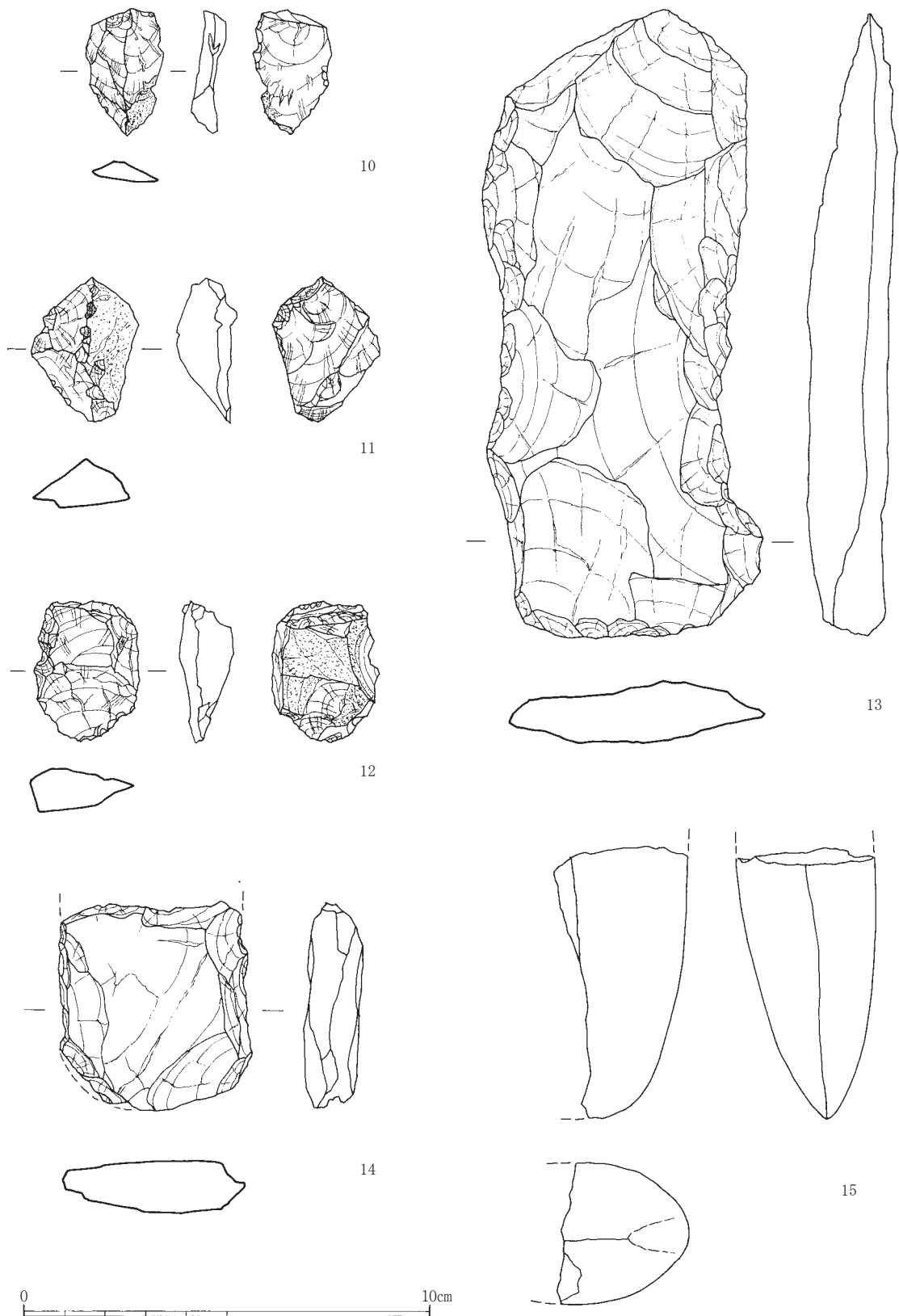
14は肉厚となる土師器皿で、胎土は精良。器表もあまり荒れていない。15は底部と体部が接合できないが図上復元したもので、これも胎土は精良といってよい。器表はそれほど荒れているようには見えないが、外底面には糸切り、篋切りの痕跡が見えない。

16は須恵器甕の小片で、口端部を小さく強く外反させる。胎土精良で調整もごく丁寧である。17は残存する体部上端付近が部分的に灰白色になるが、瓦器椀であろう。高台の1/4ほどが残存する。高台は比較的しっかりとっていて、残存する体部は直線的である。器表が荒れていて調整痕は見えないが、胎土は非常に精良。18は黒色土器か。これも器表が荒れているが、外面は全体に灰赤褐色～灰黄褐色、内面は灰黒色となる。器肉は外面と同じ色相である。これも高台が1/4ほど残存。これは胎土に最大5mmほどのクサリ礫等が混入する。

「南西隅茶褐色土」出土？遺物（第8図19～21）

19～21は注記が漏れているが、3号溝状遺構の南東に連続するように位置していた浅い落ち込みからのものであろう。これは長軸15m以上、短軸10mほどの大きな落ち込みで、深さは0.2～0.3mと浅い。底の大部分が川原石で覆われ、その上に茶褐色土が堆積していた。土器以外には木質（加工したものではない）や馬歯と思われるものなどが若干出土している。

19は土師器皿の小片で、口縁部付近が1/4強残存する。体部の立ち上がりが浅く、また底部との明瞭な境はなく、底部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。外底面は回転糸切痕が残り、内面は丁寧に仕上げられる。20・21は土師器椀で、色調が微妙に異なるが同一固体と思われる。20は小片。21は高台付近は完周し、口縁部付近は1/4弱が残存する。高台はシャープさを欠くが、断面方形に近いしっかりとした形状となり、体部は内彎しつつ立ち上がって口端部が小さく外反する。器表が多少荒れていて調整痕はよく見えないが、体部外面上半では横撫でによる弱い凹凸が目立つ。22は瓦器椀で、1/4強が残存する。繊細な感じの高台を付し、体部は先の土師器椀と同様に内彎しつつ立ち上がる。これも器面が荒れているが、内外面で部分的に暗文が見える。また、体部中位以上の外面に3条の弱い沈線が刻まれる。沈線を意図的に刻む例は一般的ではなく、完存するものでもないので、意図的なものか測りかねる。調整も丁寧に指押さえなどは見えない。体部内外面ともに上半が黒色化し、下半は暗灰色に近い。なお、高台に対応する見込み付近は灰白色、高台内も同様である。



第11图 出土遺物実測図3 (2/3)

石製品等（図版6、第10・11図）

1は安山岩製の石鏃の未製品か。金山産サヌカイトの可能性ある。2～5はスクレイパー。2はハリ質安山岩製。3は安山岩であるが、これも金山産サヌカイトの可能性ある。弥生時代のものか。4は姫島産黒曜石製。5は周辺で見られる褐色または黄褐色の色調を呈する珪質岩である。旧石器の可能性ある。6は安山岩製の石匙で、一部欠損する。7は黄褐色を呈する珪質岩製のクサビ形石器である。8は姫島産黒曜石製の二次加工剥片である。一辺に刃部加工を有する。9は微細剥離を有する使用痕剥片である。姫島産黒曜石製。10～12は珪質岩製の剥片である。いずれも背面に自然面を残す。10は他の珪質岩に比べやや赤みが強い。

13・14は緑色片岩製の打製石斧である。13は刃部を欠損している可能性がある。14は石斧として使用された後、折れた面を二次加工したことが確認できる。あるいは何かに再利用した可能性が考えられる。

15は表採品の磨製石斧であり、刃部片のみ残存する。緑色凝灰岩製。

表2 竹並大内田遺跡出土石製品観察表

番号	器種	石材	出土遺構	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
1	石鏃の未成品か?	安山岩	溝3南半砂礫層	25	17	3	1.34
2	スクレイパー	ハリ質安山岩	溝3南半砂礫層	35	25	12	8.29
3	スクレイパー	安山岩	溝3南半砂礫層	50	58	11	43.42
4	スクレイパー	姫島産黒曜石	溝3南半砂礫層	43	49	18	35.71
5	スクレイパー	珪質岩	溝3南端上層	29	29	9	5.41
6	石匙	安山岩	南西暗茶褐色土	25	(39)	6	3.87
7	クサビ形石器	珪質岩	溝3南端上層	35	23	11	8.12
8	二次加工剥片	姫島産黒曜石	溝3南端上層	26	43	12	13.57
9	使用痕剥片	姫島産黒曜石	南辺沿落込西半	35	36	8	6.7
10	剥片	珪質岩	溝3茶褐色土(上層)	31	19	8	3.1
11	剥片	珪質岩	溝3茶褐色土(上層)	36	26	15	8.75
12	剥片	珪質岩	溝3南半砂礫層	35	26	11	11.22
13	打製石斧	緑色片岩	溝1	154	69	22	250.39
14	打製石斧	緑色片岩	溝3南端上層	(52)	47	13	48.88
15	磨製石斧	緑色凝灰岩	表採	(67)	(29)	(35)	84.71

5) 小 結

遺構・遺物は乏しかったが、これは本来的に集落の縁辺に位置したため、また圃場整備事業などによる部分的な掘削も影響しているものと思われる。以下で、簡単にまとめてみたい。

出土遺物には珪質岩を用いた、後期旧石器時代に属する可能性がある石器も含まれている。平成3年度に実施された鬼熊遺跡の調査では珪質岩製のナイフ形石器などが出土しているが、福岡県東部、京都郡・築上郡を総称する京築地域と呼ばれる一帯では広く珪質岩を用いた石製品が見られ、使用された時期も旧石器時代後期から縄文時代の古い段階にほぼ限られるようである。今回の調査でもプライマリーな状態ではないが、全体の遺物量からすれば比較的多くの同種石製品等が採集されていて、この一帯が古くから生活の場として利用されていたことを示す資料が新たに加えられたといえる。

弥生時代の遺構としては前期後半の貯蔵穴が1基単独で検出されたが、規模は直径1.2m、深さ0.15mと通常の例に比して著しく小型である。深さは削平を考慮しなければならないが、直径もいわゆる貯蔵穴のイメージとはずいぶん異なる。ちなみに、先の鬼熊遺跡で調査された貯蔵穴57基の規模を見ると、3割ほどの16基が底径1.5m以下となっていて、そういう意味では特異な規模ではないといえる。底径2mを超えるものも2割強でしかなく、この遺跡の貯蔵穴の規模は総じて小規模である。ちなみに、本遺跡の北西4kmほどの丘陵地にある下稗田遺跡では1852基の貯蔵穴が調査されたが、平均的な規模で底径2mほどであるという。この違いは、花崗岩バイラン土という水はけのよい土質と丘陵上にあって雨水だけに配慮すれば洪水も地下水も無視できるという地質・地形的な要因によるものであろう。

1・3号溝状遺構などから出土した土器群は、土師器・黒色土器碗や白磁からなる構成で、およそ12世紀代に比定できるものであろう。第8図9に示した丸底傾向の碗についてはより遡るものであるかも知れない。1号溝状遺構は南北方向をもって調査区内に現れるが、すぐに西へ曲がっていく。その南西側の地山は緩やかに下降していたことから、これは地形に沿って掘削されたようである。砂層が数枚堆積していて、水流があったようであるが、幅0.8m、深さ0.2mという規模を考慮すれば、どれほどの意味を持っていたのであろうか。

3号溝状遺構については特に北側で形状が不整であるが、床面に多くの礫が貼り付くように堆積していたことから江尻川の氾濫によって乱れ、あるいは機能を失ったものと思われる。先に記したように、この溝の西側はわずか1mほどで段落ちとなり、そこは一面の砂礫層であった。もとより、砂礫層がいつ形成されたものか不明であるが、この3号溝状遺構が人為的に掘削された遺構であることは間違いないであろう。そして、掘削時は床面幅3mほどの規模で直線的になされていたようである。土層図を作成した付近での深さは0.6mで、床面の形状は整っている。この溝状遺構の意味については終章で再度記す。

註

下稗田遺跡・鬼熊遺跡の文献は「位置と環境」を参照されたい。

佐藤浩司「12世紀の食前具－愛宕遺跡の土坑一括資料を中心にして－」（財団法人北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室『研究紀要』第11号、1997）

木太久守「豊前企救郡における平安時代初頭の丸底杯－御座遺跡第1次試掘調査出土遺物の紹介をかねて－」（財団法人北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室『研究紀要』第15号、2000）

2. 草場角名遺跡

1) 概要

平成22年度の調査

草場角名遺跡の調査対象地は3筆からなるため、便宜上北から1・2・3区と分けて呼称している。1・2区は工事用道路を早急に造成したいという西日本高速道路株式会社の要請を受けて、センター杭から北東側の約1/2を22年度に調査を行った。1区では東西方向に灌漑用水路が存在していてさらに南北に分けたため、1区をA～D区、2区をA・B区に細分してある。

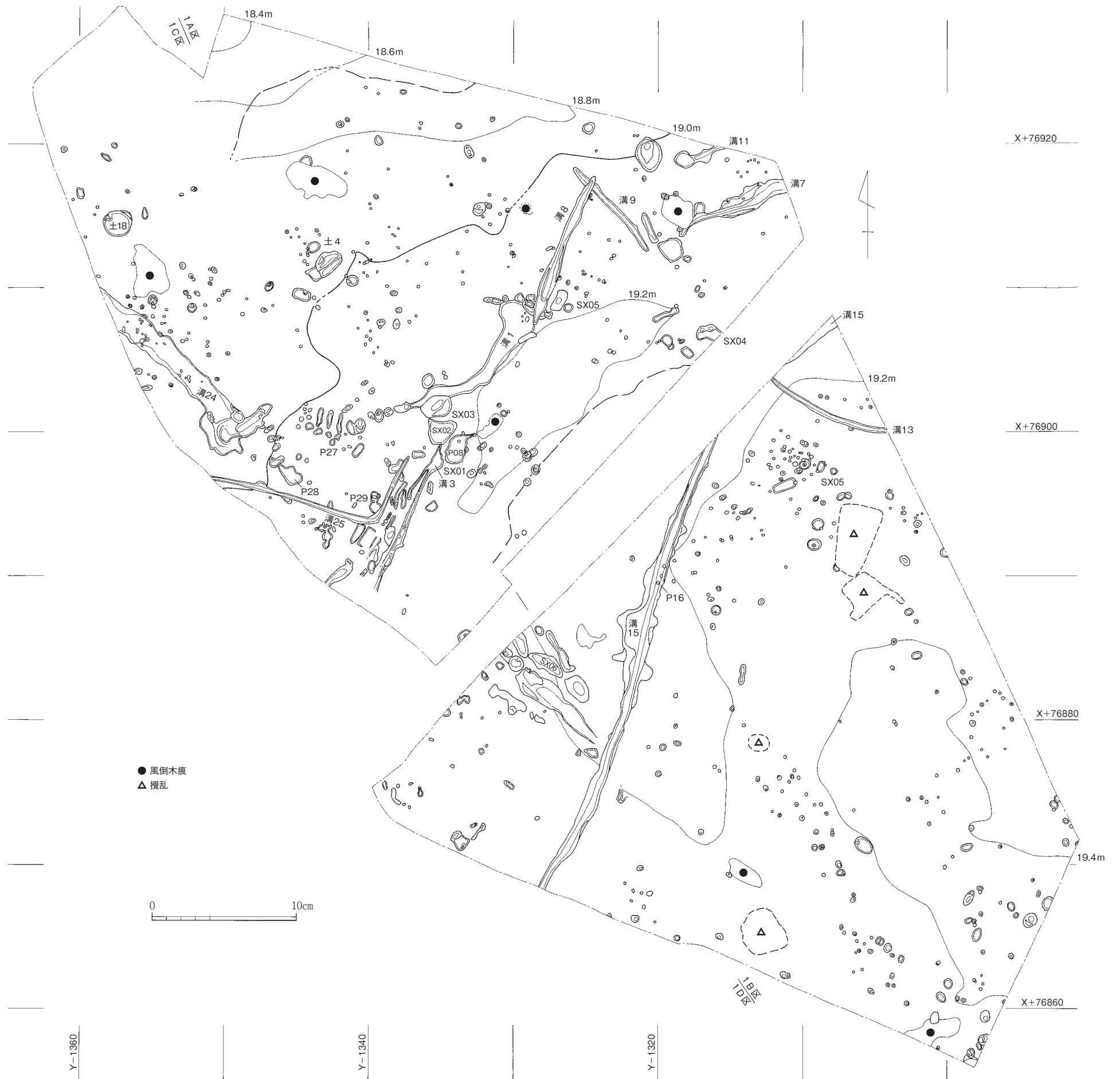
平成22年度は1A・B区及び2A区の調査を行った。平成23年1月7日および14日にプレハブなどの機材搬入を行い、準備作業を行った。併行してバックホーによりヤードの整備および1A・B区の表土剥ぎを行った。その後作業員を導入し、遺構検出作業および遺構掘削作業を順次行った。2月末に遺構の大半の掘削を終え、3月3日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。その後、遺構の図化や補足の調査を行い、3月16日にプレハブなどの撤去、14～22日に重機による埋め戻しを行って平成22年度の調査を終了した。

平成23年度の調査

平成23年度は1C・D区、2B区および3区の調査を実施した。

6月6日からバックホーを搬入し、まず3区から表土掘削を開始した。3区ではその北端と南端は黒色の粘質土が地山となっていて遺構・遺物を確認できなかった。調査区中央部分は砂質土で、部分的に5cm大ほどの礫が露出していた。調査が田植え時・梅雨と重なったため、浸透してくる水で調査区が毎朝冠水し、作業時間中は排水のため3インチのガソリンポンプを常に稼働させなければならなかった。6月21日から作業員を投入して遺構の掘削を行い、中央部分で溝と柱穴を確認した。また、土坑状の落ち込みを掘削したが遺物は確認できず、遺構の壁と床面にバックホーの爪痕が見られたため、圃状整備時の攪乱坑と判断した。溝の調査では、全体的に浅いため検出の時点で消えてしまう箇所もあった。7月14日にローリングタワーによる全体写真の撮影を行い、その後に埋め戻しを行った。

3区の埋め戻し終了後、7月28日から1区の表土掘削を開始した。1区は農業用水の塩ビ管により調査区が2分割されていた。ここでも3区同様に地山が砂質土で、礫も見られた。8月1日から遺構の検出を行うが、この頃には乾燥が激しく作業が困難であった。8月16日から1C区の調査を開始した。その後、9月7日から2B区の表土掘削を開始、10月12日にラジコンヘリによる空中撮影を行い、同14日から1C区と合わせて埋め戻し作業を開始し、すべての作業を終了した。



第12図 草場角名遺跡1区遺構配置図 (1/300)

2) 1区の調査

現況では一面の水田であるが、1区北側は谷部に向かって緩やかに下る斜面であり、2区南側にも小さな谷状地形があるようである。その間に挟まれた標高18~20m、幅100mほどの微高地上に遺跡が展開していた。おおむね南西側が高く北東側が低い。これは元々の地形が南西側の山地丘陵からの埋没扇状地または沖積地内の埋没低段丘であることに由来するものであろう。表土を除去すると、東南側には砂礫堆が露出している部分があった。1D区南側は、微高地上部を形成していた風化ローム層またはロームの二次堆積層がほとんど削平され、砂地が露出しており遺構は希薄である。

主要な遺構は弥生時代前期と考えられる土坑2基、溝1条のほか、時期や性格不明の土坑10基、中世から近世・近代までの溝状遺構20条などからなる。遺物は弥生時代前期後半の遺物を主体とし、少量の縄文土器、弥生時代後期甕形土器、古墳時代後期から古代にかけての須恵器、古代土師器、中世陶器・平瓦、近世陶磁器などが出土した。

土 坑

4号土坑（図版9、第13図）

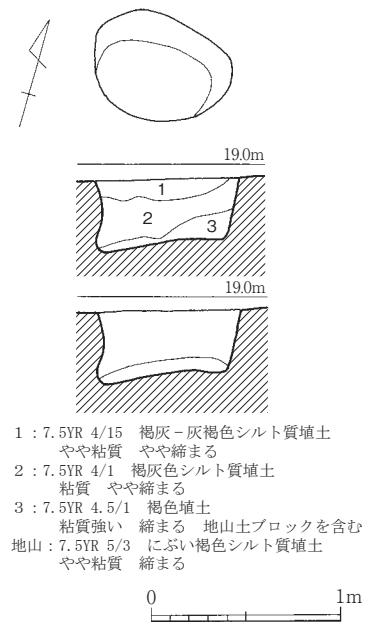
1A調査区の西側中央付近に位置する。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.4mの楕円形の土坑である。南側の壁がややオーバーハングしている。埋土は3層に分かれる。出土遺物はないが、周辺遺跡の状況から弥生時代の貯蔵穴の可能性はある。

18号土坑（図版9、第14図）

1D調査区の北西側に位置する、南北2m、東西1.9m、深さ0.45mの円形土坑である。

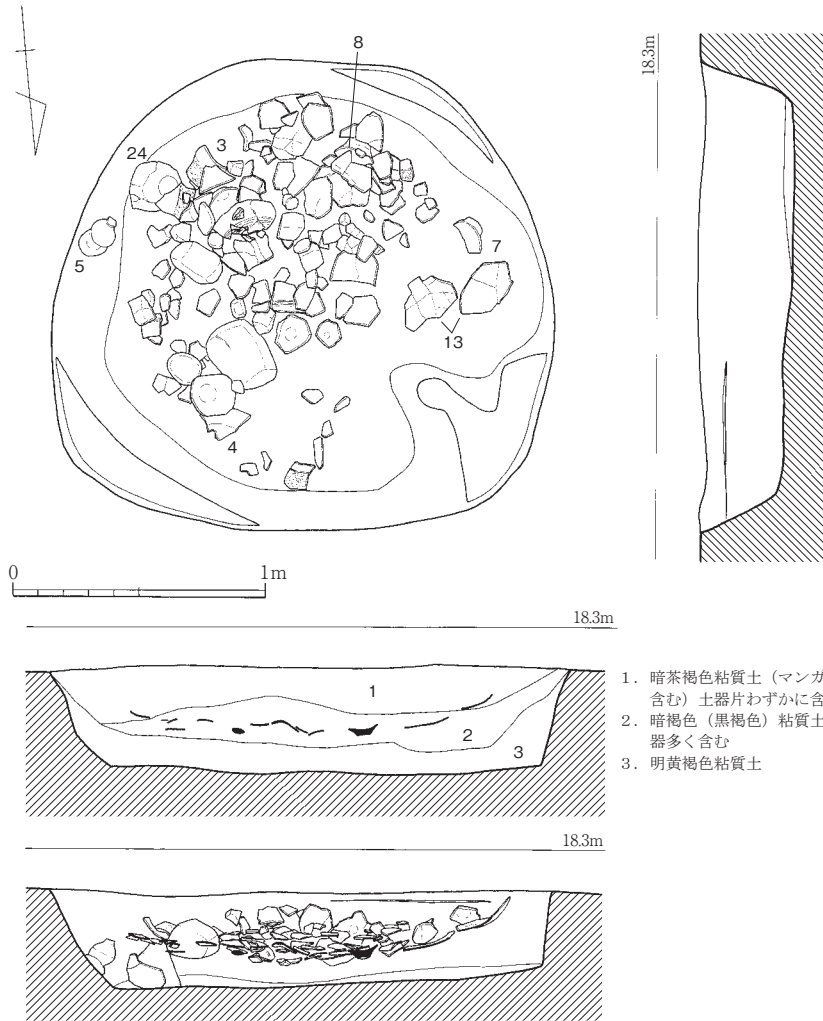
埋土は暗茶褐色粘質土および暗褐色土で、出土土器の多くが暗褐色土に集中している。これより下層の明黄褐色土になると遺物は含まれなくなる。出土遺物が多いが、残存状態の良いものは2点しかなく、その他はほとんどが破損している。このため廃棄土坑とも考えられる。出土遺物より遺構の時期は弥生時代前期で、全体的に板付Ⅱ式にあたると思われる。

出土土器（図版13、第15・16図）1~13は壺である。1は口縁部~肩部で、器表面は摩滅して調整は明瞭ではない。頸部に接合痕が見られる。2は口縁部付近に黒斑が見られる。器表面は剥落しており調整は不明である。3は肩部のみで、突帯の下に羽状文を施す。4は頸部に3条の沈線があり、肩部には3条・2条の沈線の間に羽状文を施す。この羽状文は2条の縦方向の沈線で4つに区画されるようである。5は唯一完形に近い壺である。土坑の東隅の床面からやや上方で出土。頸部と肩部に篋描きによる沈線が入り、段状になる。器表面は剥落しているが、体部下方で撫で調整が見られる。底部は上げ底で脚状に



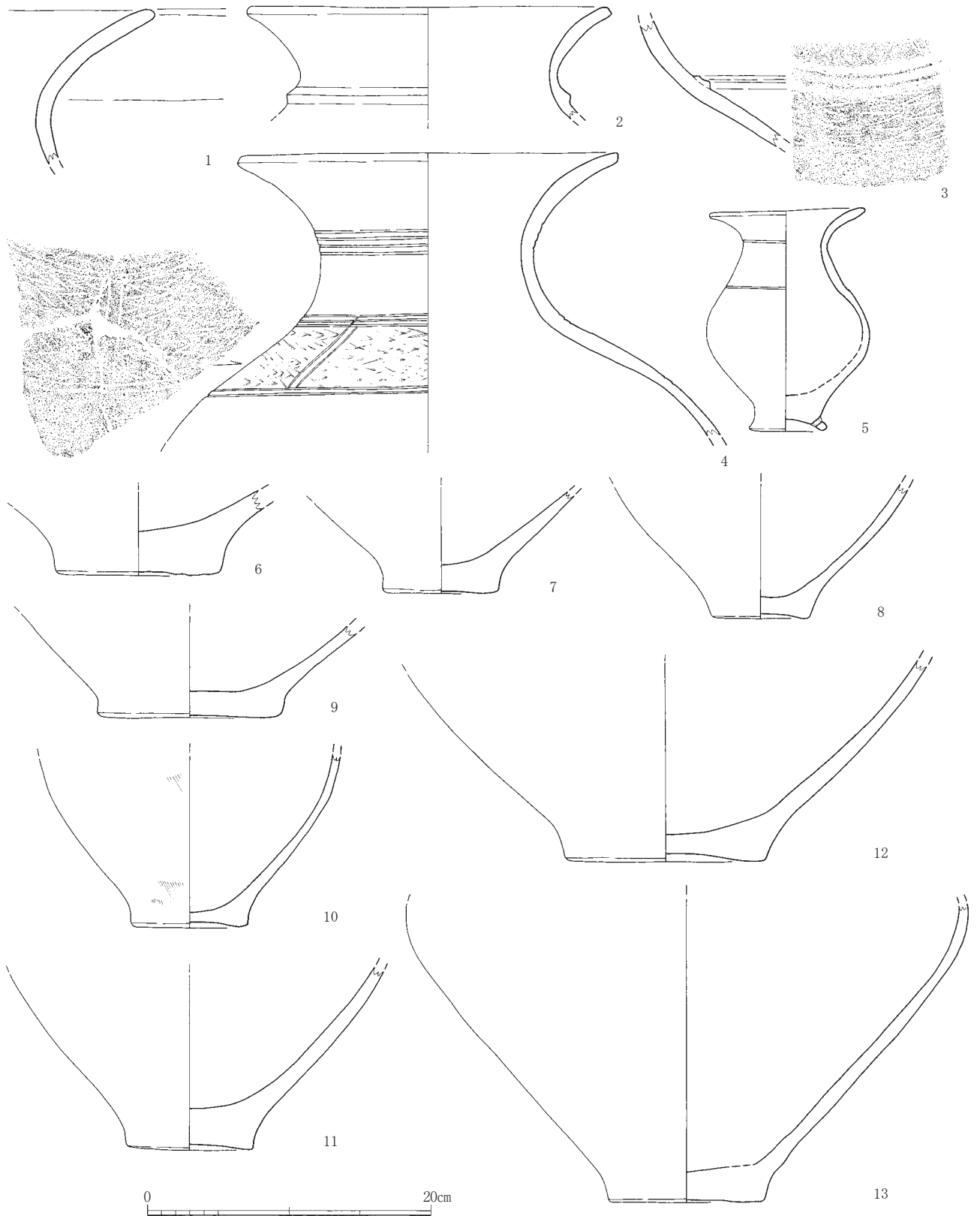
- 1 : 7.5YR 4/15 褐灰-灰褐色シルト質埴土
やや粘質 やや締まる
- 2 : 7.5YR 4/1 褐灰色シルト質埴土
粘質 やや締まる
- 3 : 7.5YR 4.5/1 褐色埴土
粘質強い 締まる 地山土ブロックを含む
地山 : 7.5YR 5/3 にぶい褐色シルト質埴土
やや粘質 締まる

第13図 4号土坑実測図(1/40)

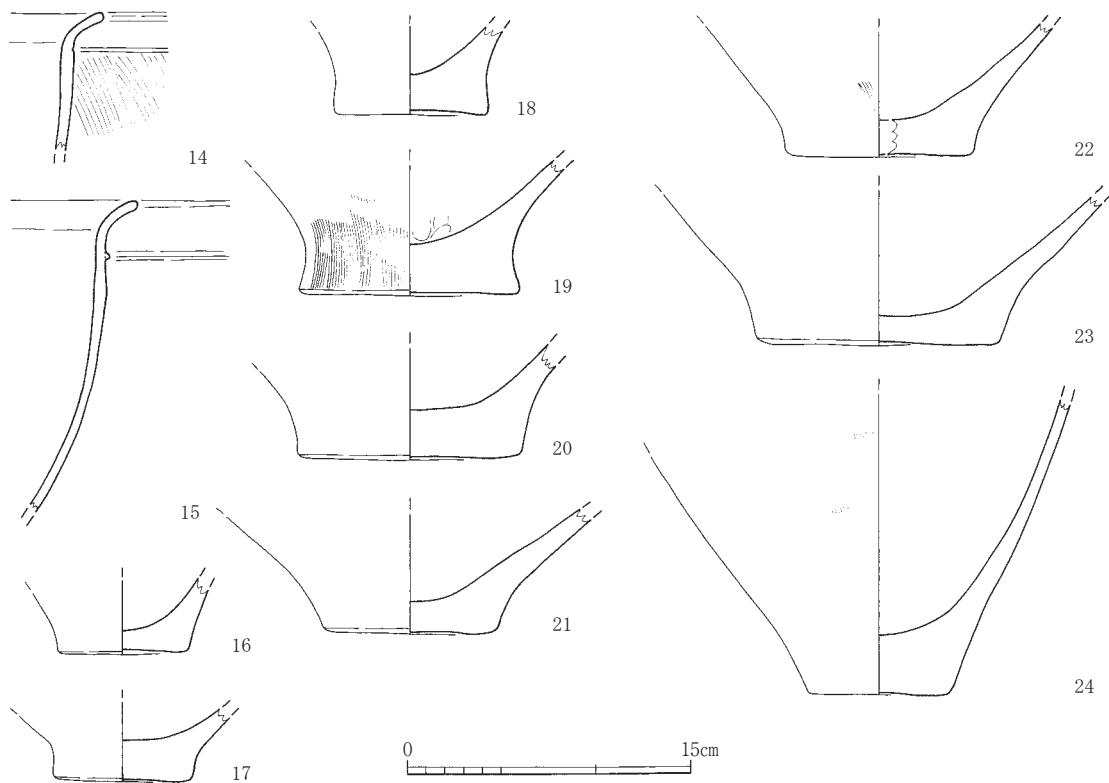


第14図 18号土坑実測図 (1/30)

なり、焼成前に穿たれたと思われる穿孔がある。6は復元底部径11.8cm。内外面共に摩滅しており調整は不明である。8は体部から底部にかけて残存している。底径は6.9cm。底部はやや上げ底気味である。底部から体部へは緩やかに立ち上がる。10は外面に刷毛目を施す。底部径は8.2cm。底部はやや薄く、上げ底気味である。11は底部径8.9cm。内外面摩滅しているが、内面に一部撫での痕跡が残る。また内外面の一部に黒斑が見られる。底部はやや上げ底で厚い。12は体部から底部が残り、底部径は14.2cmを測る。大型の壺で、内外面は摩滅しており調整は不明である。土坑のほぼ中央から出土。13は復元体部最大径39.3cm。内外面は剥落しており調整不明で、体部はやや薄い。14~24は甕である。14は1条沈線を施し、この下方に刷毛目調整を施す。16は復元底部径7cm。内面は黒色で、炭化物が付着したものか。底部から体部へは直線的に立ち上がる。19は底部径11.6cm。内面は撫で調整を行い、底部に指圧痕が見られる。外面は刷毛目調整を行う。底部は厚いが、これに比べて体部はやや薄い。22は19の横に出土。外面は摩滅するが一部に刷毛目が残存する。24は土坑の東隅の床面直上から逆さの状態出土。底部径は7.5cm。内外面摩滅するが内面は撫で調整がわずかに残る。外面も摩滅するが刷毛目が一部に残る。底部から体部へは直線的である。



第15图 18号土坑出土遗物实测图1 (1/4)



第16図 18号土坑出土遺物実測図2 (1/4)

溝状遺構

1号溝状遺構 (第12図)

1 A区の南東側に位置し、1 A区中央付近の微高地の礫層が露出している砂礫堆におよそ平行する。延長約12m。西側は広く浅くなり不明瞭になっている。幅0.9~2m、深さ0.4m。埋土は大きく2層に分かれ、掘り返しが確認される。水田4と関連する可能性が高い。

出土土器 (第23図4) 第23図4は1号溝状遺構から出土した弥生時代後期の壺形土器口縁部片である。流れ込みであろう。

2号溝状遺構 (第17図)

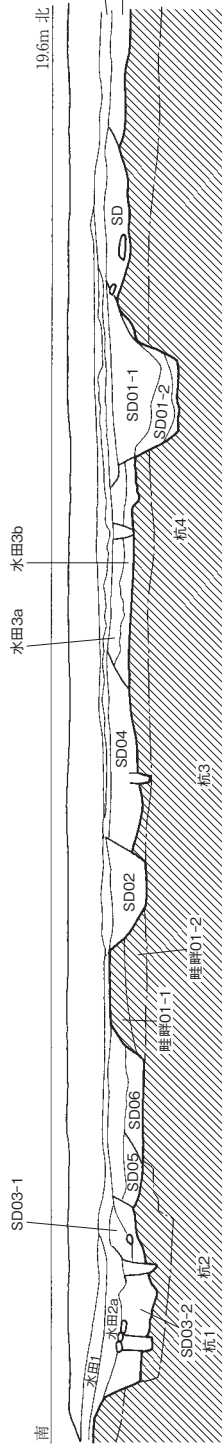
1 A区西壁において1・3号溝状遺構の間で確認したが、平面では検出時にほとんど掘り下げてしまい検出できなかった溝である。幅0.6m、深さ0.2m。1 A区西壁の状況から1 C区で検出された25号溝状遺構と同一である可能性がある。すぐ南側にはやはり平面では検出できなかった1号畦畔状遺構があり、セット関係をなすものと考えられる。4号溝状遺構を切っている。

出土土器・土製品 (第23図6・17) 6は弥生時代甕形土器底部片である。17は2号溝状遺構から出土した平瓦片である。古代から中世の所産であろう。

3号溝状遺構 (第17図)

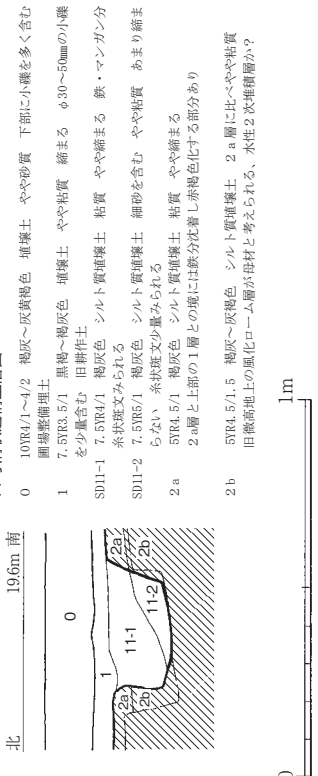
1 A区の南西側では一部しか確認できずそれ以上東側には延長していないが、1 C区へ南南西へと延び、途中分岐して、1 C区調査区西壁付近で南にやや屈曲する。1 C区調査時には1 C区5号溝状遺構として認識していたが、同一のものの延長であるので報告時に改めた。1 A区では

IA区西壁南側土層図



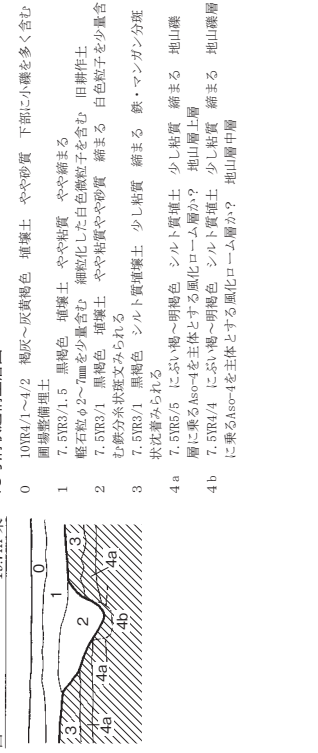
- 0 7.5YR5/1 褐色 シルト質堆積土 弱い粘質 やや縮まる ブロック土を含む 圃場整備層土
- 水田1 7.5YR4/1 褐色 シルト質堆積土 やや粘質 やや縮まる 攪拌されている 小礫φ3~7mmを微量含む
- 水田2a 7.5YR3.5/1 黒褐色 粘質 やや縮まる 攪拌されている 鉄分系沈降文みられる
- 水田2b 7.5YR3.5/1 黒褐色 粘質 やや縮まる 攪拌されている 鉄分系沈降文みられる
- 水田3 10YR3.5/1 黒褐色 シルト質堆積土 やや粘質 やや縮まる 攪拌されている 鉄分系沈降文みられる
- 水田4a 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質堆積土 少し粘質 やや縮まる 攪拌されている 鉄分系沈降文みられる
- SD01-1 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質堆積土 少し粘質 固く縮まる 白色粒子を含む
- SD01-2 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質堆積土 粘質あまりなりなし 縮まる 白色粒子を含む
- SD03-1 7.5YR3.5/1 黒褐色 シルト質堆積土 やや粘質 少し縮まる 3号溝状遺構層土上層
- SD03-2 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質堆積土 やや粘質 少し粘質 少し縮まる 3号溝状遺構層土下層
- 水田3a 水田3b
- 水田2b 水田4
- SD01-1 SD01-2
- SD02 SD04
- SD05 SD06
- 畦畔01-1 畦畔01-2
- 植4
- 植3
- 植2
- 植1

11号溝状遺構土層図



- 0 10YR4/1~4/2 褐灰~灰黄褐色 堆積土 やや粘質 下部に小礫を多く含む 圃場整備層土
- 1 7.5YR3.5/1 黒褐色 褐灰色 堆積土 やや粘質 縮まる φ30~50mmの小礫を少量含む 田耕作土
- SD11-1 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質堆積土 粘質 やや縮まる 鉄・マンガン分系沈降文みられる
- SD11-2 7.5YR6/1 褐灰色 シルト質堆積土 細砂を含む やや粘質 あまり縮まらぬ
- 2a 5YR4.5/1 褐灰色 シルト質堆積土 粘質 やや縮まる
- 2b 5YR4.5/1.5 褐灰~灰褐色 シルト質堆積土 2a層に比べやや粘質 旧飯高地上の風化ローム層が母材と考えられる、水性2次頓層か?

13号溝状遺構土層図



- 0 10YR4/1~4/2 褐灰~灰黄褐色 堆積土 やや粘質 下部に小礫を多く含む 圃場整備層土
- 1 7.5YR3/1.5 黒褐色 堆積土 やや粘質 やや縮まる 藍石粒φ2~7mmを少量含む 細粒化した白色微粒子を含む 田耕作土
- 2 7.5YR3/1 黒褐色 堆積土 やや粘質やや砂質 縮まる 白色粒子を少量含む 鉄分系沈降文みられる
- 3 7.5YR3/1 黒褐色 シルト質堆積土 少し粘質 縮まる 鉄・マンガン分系沈降文みられる
- 4a 7.5YR5/5 にぶい褐~明褐色 シルト質堆積土 少し粘質 縮まる 地山礫層に乗るAso-4を主体とする風化ローム層か? 地山層上層
- 4b 7.5YR4/1 にぶい褐~明褐色 シルト質堆積土 少し粘質 縮まる 地山礫層に乗るAso-4を主体とする風化ローム層か? 地山層中層

第17図 IA区西壁土層実測図 (1/40)



第18図 15号溝状遺構実測図1 (1/40)

3号溝状遺構付近を境に、北側で微高地の高い部分には礫層が露出し、ある段階で微高地を形成する上部部分が削平されてしまったことを示す。その南側、1A・1C区と1B・1D区間の現用水路（未調査）付近には浅い谷部が存在し、水田3が分布する。3号溝状遺構はその小さな谷の北側旧地形に沿って掘削されている。延長約12m、1A区・1C区境界付近で幅1m、深さ0.2m。土層では杭跡1・2が確認される。灌漑用と考えられる。

出土土器（第23図16）陶器播り鉢口縁部片である。中世備前焼であろう。

5・6号溝状遺構（第17図）

1A区西壁において3号溝状遺構の北側で確認したが、平面では検出時にほとんど掘り下げてしまい検出できなかった溝状遺構である。5号溝状遺構は幅0.4m以上、深さ0.1m、6号溝状遺構は幅0.6m以上、深さ0.1m。6号溝状遺構は5号溝状遺構に、5号溝状遺構は3号溝状遺構に切られている。

出土土器（第23図14）土師器高台付杯底部片である。古代の所産であろう。

9号溝状遺構

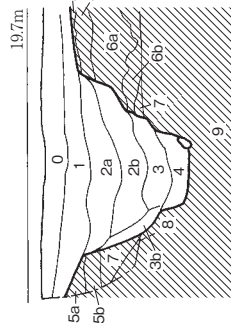
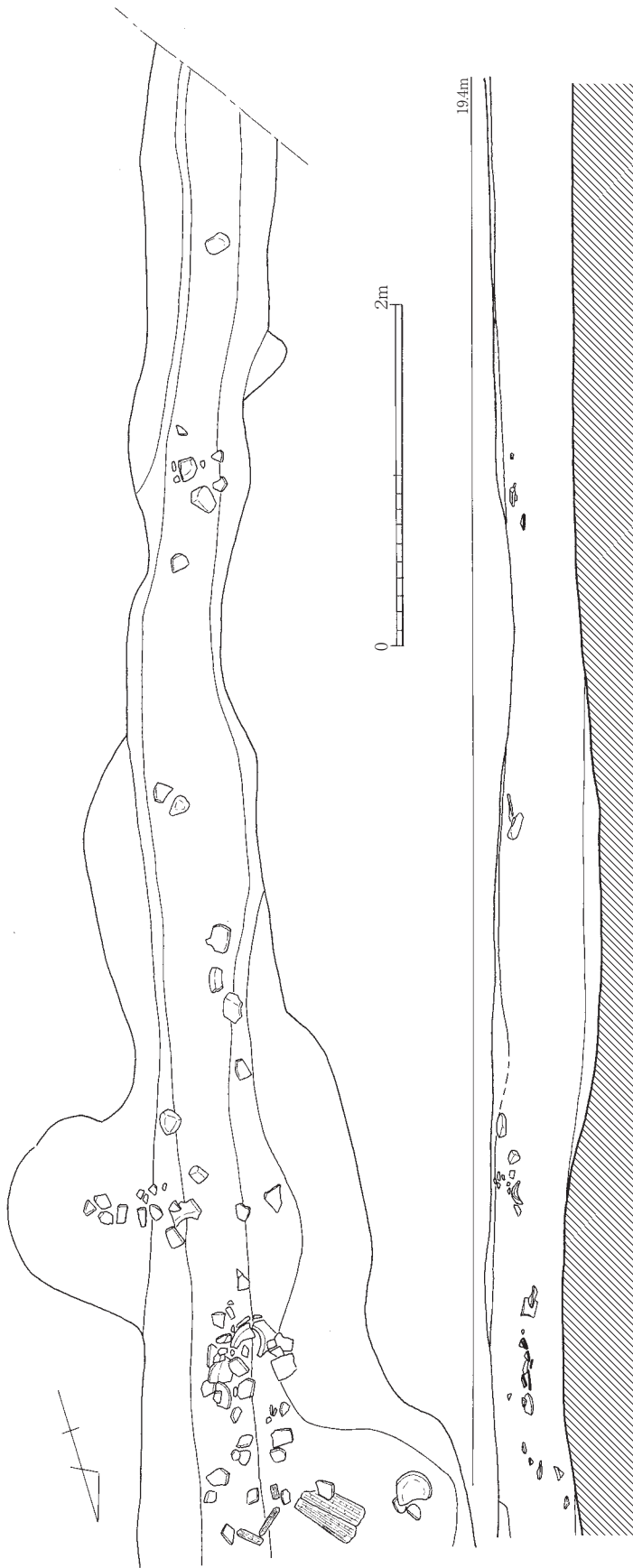
1A区中央やや北側付近に位置し、8号溝状遺構に切られている。長さ8m、幅50cm、深さ10cm。単層の埋土で、5YR3/1 黒褐色重埴土、粘質強く固く締まる。白色粒子と粗砂粒をわずかに含む。鉄・マンガン分の糸状斑文が顕著に認められる。

15号溝状遺構（図版10～12、第18・19図）

1D区から1B調査区の北側に位置する。1B調査区の北東隅で検出されたものを調査時には14号溝状遺構とし、北西側のものを15号溝状遺構とし、また1D区のものを1D区溝1としていたが、埋土の状況、検出や溝底部のレベルなどから同一のものと判断し15号溝状遺構として報告する。1D区から1Bにかけてやや東に傾いて北側に向かうが、1B区北壁中央付近で東側に向きを変え弧状を呈する。屈曲部付近は使用中の用水路があったために一部調査ができなかった。調査区内での総延長約45mである。おおむね幅0.6～1m、深さ0.4～0.7mである。後世の削平の影響もあろうが、検出面では北側ほど細くなり浅くなっている。1D区中央付近が最も残りがよく深く、南側では1D区西壁付近で再び浅くなっている。

上記の通り1A・1C区と1B・1D区の間には現在の用水路があるが、その付近は小さな谷状地形になっている。1B区北側では、15号溝状遺構の南側に19.20mの等高線が位置し、おおむね平行していることから、1B区やや高い微高地の北の縁に沿って15号溝状遺構が掘削されていることになる。溝にはところどころに幅が広がる場所があり、部分的に水流によるものか落ち込み状にえぐられているかのような箇所があった。溝中や周囲では小さな杭跡が検出されたが、規則性を示さなかったため、一連のものとして調査は行わなかった。左右に広がっている部分を水口・水尻部として考えられることから、溝状遺構を灌漑用であったと推測する。ただし前述の通り水口・水尻部として考えられる箇所またはその周囲においても顕著な杭跡や堰状遺構などは検出できなかった。また周囲においてもこの溝に伴う畦畔や水田面などの水田痕跡も検出することはできなかった。

最上層の1層は相対的に新しい時期の遺物も含み、溝が埋没した後に凹み状になり上位から堆積



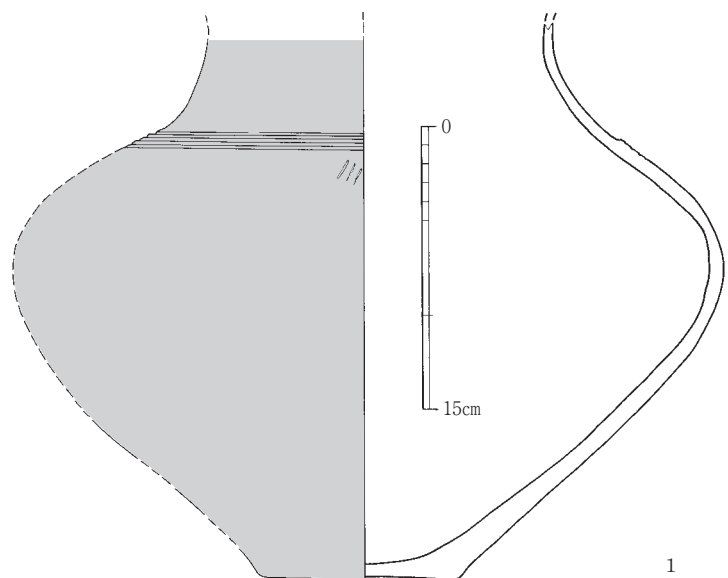
- 0 褐灰～灰黒褐色重焼土 やや砂質 下部に小礫を多く含む 副塚整備埋土
 - 1 黒褐色重焼土 やや粘質 やや締まる 産石粒の2～7mmを少量含む 白色微粒子を含む 田耕作土
 - 2a 黒褐色重焼土 やや粘質 やや砂質 締まる 白色粒子を少量含む 15号溝状遺構埋土上層
 - 2b 黒褐色重焼土 粘質強い、少し砂質 締まる 白色粒子を少量含む 15号溝状遺構埋土上層
 - 3 黒褐～褐灰色重焼土 粘質非常に強い やや締まる ややシルト質 粘土ブロックを少量含む 15号溝状遺構埋土中層
 - 3b 黒褐～褐灰色重焼土 粘質非常に強い やや締まる ややシルト質 地山土小ブロックを含む 15号溝状遺構埋土中層
 - 4a 黒褐色重焼土 粘質強い、少し締まる 少しシルト質 15号溝状遺構埋土下層
 - 4b 黒褐色重焼土 やや粘質 少し締まる 少しシルト質 小礫を含む 15号溝状遺構埋土下層
 - 4c 黒褐色重焼土 少し粘質 少し締まる 砂質シルト質 小礫を多く含む 部分的に存在
- ：この図示範囲内にはない15号溝状遺構埋土下層)
- 5a 灰褐色シルト質重焼土 やや粘質 やや締まる 1層土ブロックを含む 旧水田層
 - 5b 灰褐色～黒い赤褐色シルト質重焼土 やや粘質 やや締まる 1層土ブロックを少量含む 旧水田層
 - 6a 褐灰～灰褐色シルト質重焼土 やや粘質 やや締まる 旧水田層を遷移層か
 - 6b 褐灰～灰褐色シルト質重焼土 やや粘質 締まる 旧水田層?遷移層か
 - 7 におい 褐～明褐色シルト質重焼土 少し粘質 締まる 地山層
 - 8 褐色シルト質重焼土 少し粘質 締まる 9層に束る 9層に束る 地山層 (7・8層はAso-4を主体とする風化ローーム層または2次埋積と考えられる 15号溝状遺構下部との接触部はグライ化しており、褐灰色で礫・砂を多く含む)
 - 9 におい 褐色シルト質重焼土 わずかに粘質 締まる 礫を多く含む 地山層

第19図 15号溝状遺構実測図2 (1/40)

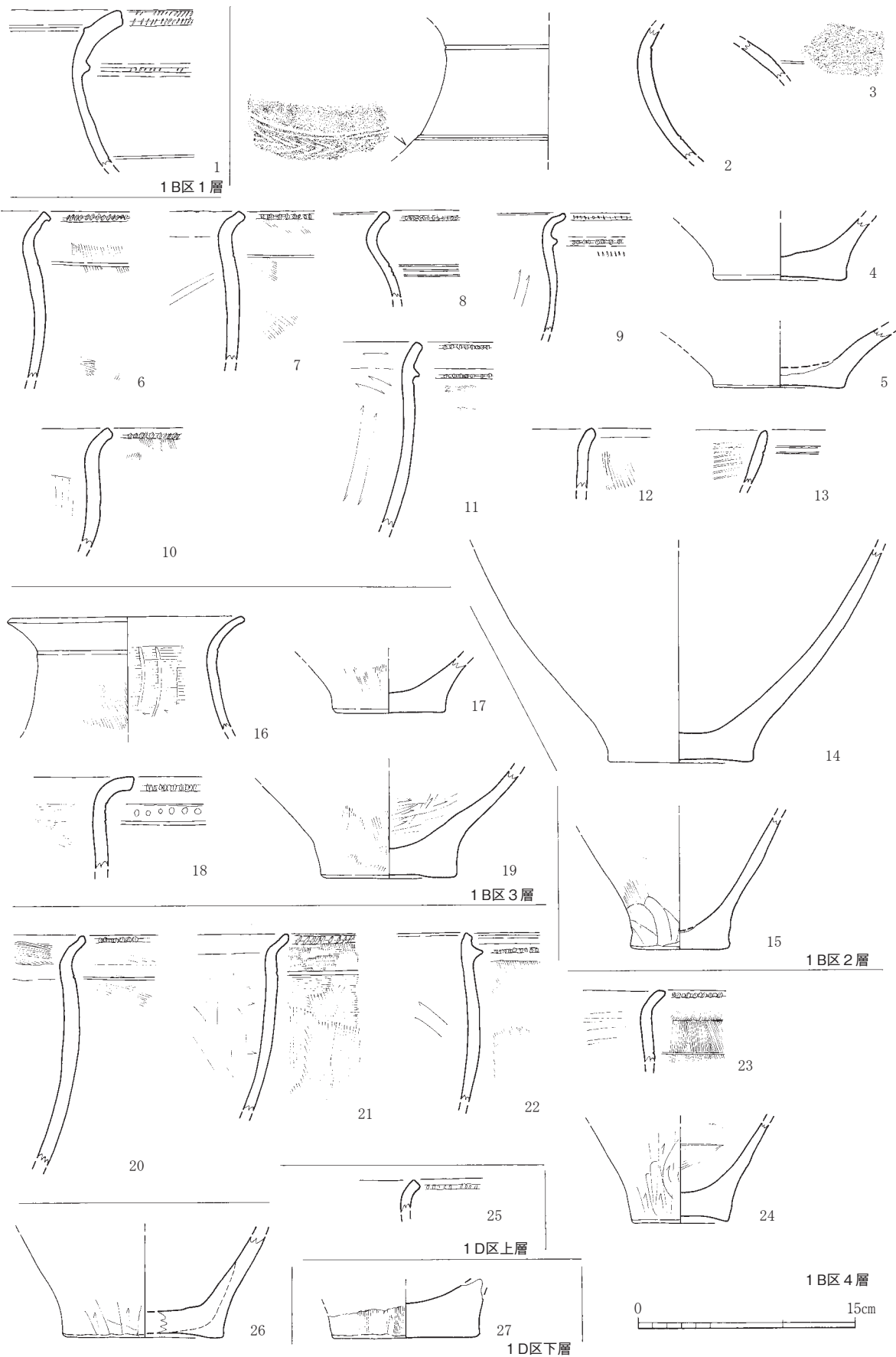
したものであろう。2層から4層が溝の埋土で、2層が上層、3層が中層、4層が下層と認識できる。1A区と1D区では調査者が異なるために厳密には比定できないが、おおむね1A区2層が1D区上層、1A区3・4層が1D区下層と対応できよう。遺物は2a層下部からの出土が最も多く、ついで2b層で、3層や4層は出土量が少ない。自然流木や木製素材は3・4層の比較的下部から出土する傾向がある。また、遺物量の多い2層でも完形に復元できる土器はなく、溝中に意図的に埋置されたりした痕跡は明瞭に認められなかった。ただし水口・水尻部として考えられる箇所周辺には比較的遺物が多く残されている。甕形土器には特に出土する場所に傾向はないが、壺形土器には水口・水尻部周辺で出土する傾向がやや認められる。あるいは水口・水尻部周辺での祭祀行為の痕跡を示すものかもしれないが、今回明らかにすることはできなかった。出土遺物からは、前期中頃の板付Ⅱa式や中期の土器を含まず、前期後半の板付Ⅱb式期に溝が掘削され、前期終末の板付Ⅱc式期には埋まったものと考えられる。

出土土器（図版13、第20・21図）第20図は2層出土の大型壺形土器である。口縁上部を欠損する。焼成は甘く器表面は剥落しているために調整などが十分に観察できないが頸部には丹塗りの痕跡がある。頸／胴部境界は幅約3mmの浅い沈線で画され痕跡化している。その下位に4条の浅く細い沈線を施しさらに下位に3条単位の斜線文が見られるが器表面剥落のため全体の文様構成は不明である。胴部は偏球化し横に張っている。

第21図1は1層出土の壺形土器である。口縁部内側をやや肥高させて小さな突帯を廻らし、口縁端部の上端と下端に刻目を施す。また口縁下に刻目のある突帯を付す。2～5は2層出土の壺形土器である。2は頸部と胴部の境の沈線の下位に無軸の羽状文を施している。1C区南側から2番目の水口・水尻部西側で出土した。3は無軸の羽状文を施す壺形土器胴部片である。南側から2番目の水口・水尻部東側付近で出土した。6～13、15は2層出土の甕形土器である。6は如意状の口縁下端部を突出させて刻目を施す「口縁下端凸状甕」である。1条の沈線をもつ。南側から1番目の水口・水尻部のやや北側で出土した。7と10は如意状の口縁端部の下端に刻目を施すものである。8はやや強く屈曲する口縁上部をややつまみあげ、下端部には刻目を施し、胴部上部に3条の沈線を廻らす。胴は張り口縁径よりも大きくなる。南側から2番目の水口・水尻部の少し北側で出土した。9は上部で強く屈曲し開く口縁の下端部に刻目を施し刻目突帯を廻らしている。南側から3番目の水口・水尻部の付近で出土した。11は緩く屈曲する口縁下端に刻目を施し、刻目突帯を廻らしている。南側から2番目と3番目の水口・水尻部の中間付近で出土した。12と13は砲弾形の器形に直口に近い口縁を持つものである。13は浅いが2条の沈線を持つ。14は壺形土器底部、15は甕形土器底部である。12～15は1番目の水口・水尻部のやや南側で

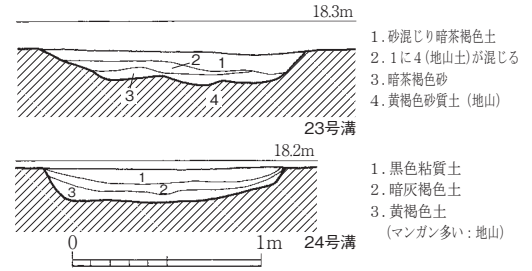


第20図 15号溝状遺構出土遺物実測図1 (1/4)



第21图 15号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)

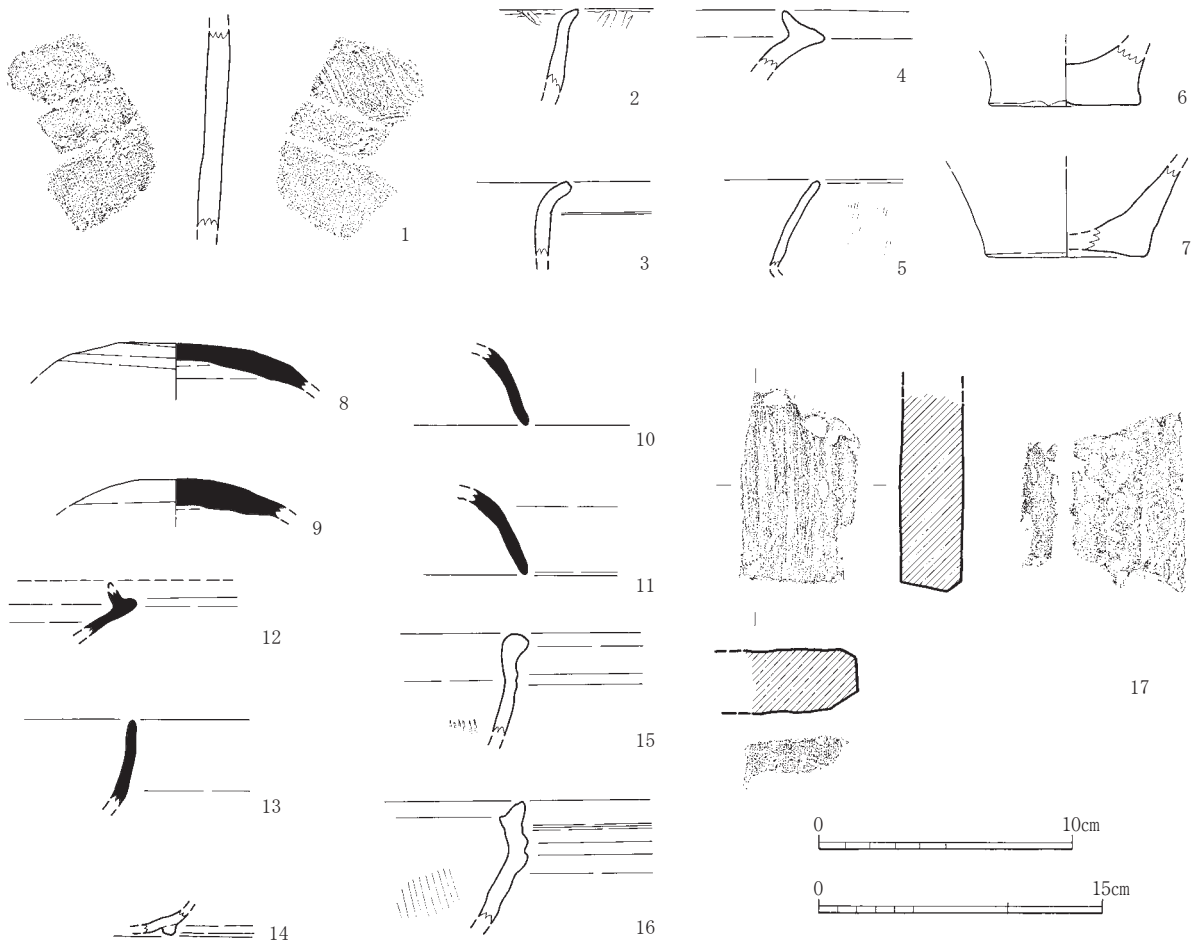
出土した。16～19は3層出土土器である。18は屈曲し開く口縁下端部に刻目を施し、その下位に2条の沈線を施し沈線間に円形の列点文を施す、瀬戸内系の甕形土器である。20～24は4層出土土器である。20・21・23は緩く屈曲する如意状口縁下端部に刻目を施し、その下位に1条の沈線をもつ甕形土器である。20・21は南側から1番目の水口・水尻部付近で出土した。22は砲弾形の器形の直口縁に刻目突帯をもつ甕形土器である。南側から2番目の水口・水尻部付近で出土した。25は1D区上層出土の甕形土器口縁部、26・27は1D区下層出土の甕形土器底部である。



第22図 23・24号溝状遺構土層実測図 (1/40)

24号溝状遺構 (図版8、第12図)

1C調査区西側中央付近に位置する。調査時には1C区溝3として認識していたが、報告時に改めた。長さ約11m、幅約1.5m、深さ約0.2m。調査区の西端から10mほど伸びたところで曖昧となり途絶える。風倒木痕と思われる不整形な深溜まりに切られている。遺物は須恵器の蓋・椀のほか弥生土器の小片や姫島産黒曜石の剥片が出土した。須恵器は溝の南側、風倒木痕から出土したもので、溝の時期は弥生時代と考えられる。



第23図 1区出土遺物実測図 (2～7・14は1/4、1・8～13・15・16は1/3)



第24図 2区遺構配置図 (1/300)

出土土器（第23図10・11・14）10・11は須恵器蓋杯の蓋である。14は土師器小片である。古墳時代末から古代であろう。

25号溝状遺構

1 C 調査区中央に位置する。調査時には1 C 区溝4として認識していたが、報告時に改めた。北東-南西方向に伸びる約5 mの短い部分は、3号溝状遺構とほぼ並行し、約90度屈曲して東北東方向へと約12m伸び、調査区外へと続く。幅は約0.3m、深さは0.2mを測り、東西・南北共に一定である。溝底レベルは西側が深く18.90m前後、東側が19.05m前後である。埋土は暗茶褐色土で、下層では灰色の粘質土が堆積する。旧水田等の溝とも考えられる。

出土土器（第23図15）陶器挿り鉢口縁部片である。中世であろう。

3) 2 区の調査

遺跡は、西南側がやや高く北側に向けて徐々に低くなっている埋没扇状地または沖積地内の埋没低段丘上にある。標高はおよそ19.60~20.0mである。2 A 区北側は小さな谷状地形となっている。また、2 A 区南東側も北東へ向けて緩く傾斜する。

中央付近には圃場整備時の暗渠排水が東北-南西方向に5条掘られ、遺構のいくつかは削平されている。また攪乱が、2 A 区北側、2 B 区北西側、2 A 区中央付近と数多く見られ、やはり遺構が破壊されている。遺構は、2 A 区北側の小谷状地形の中に17号溝状遺構が地形に沿って掘削され、また2 A 区南東側も地形に沿って21号溝状遺構が掘削されている。

2 B 区は、攪乱以外にも、元々南西側が高い微高地の上部が削平されたためか遺構の残りが悪く、南側に19号土坑が存在するほかは、柱穴群が点在する程度である。

遺物の出土量は少なく、弥生時代の磨製石斧、弥生時代前期と後期の土器片、古墳時代の土師器・須恵器片などが認められた。

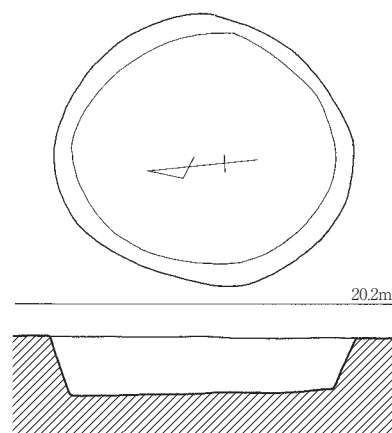
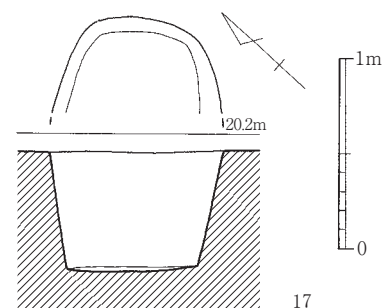
土 坑

17号土坑（第25図）

2 A 調査区の南側西壁付近に位置する。径約0.9m、深さ0.6の楕円形の土坑である。

19号土坑（第25図）

2 B 区南側に位置する。調査時にはpit32としていたが、土坑として報告する。長径1.6m、短径1.4m、深さ0.3m。



第25図 17・19号土坑
実測図 (1/40)

溝状遺構

17号溝状遺構

2 A 調査区北東に位置する。中央付近から東へ向かい調査区外へと延びている。長さ約 7 m、幅約 1.9 m、深さ約 70 cm。1 区と 2 区の間は小さな谷状地形をなしており、2 区北側は 17 号溝状遺構付近で周囲より標高が低い。その低地部に地形に沿って掘削されている。灌漑用水路であろう。

18号溝状遺構

2 A 調査区北側、17号溝状遺構の北側に位置する。17号溝状遺構に直交している。残りが悪く、小部分しか検出できていないが、17号から分かれる支線のような溝の可能性が高い。長さ 1 m、幅 0.3 m、深さ 8 cm。

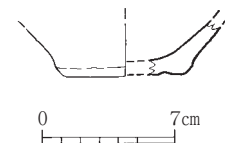
21号溝状遺構

2 A 区の南側に位置し、2 A 区北東側に落ちる谷部にほぼ傾斜に沿って掘削されている。延長約 7.2 m。東側は調査区外へと延びている。幅 0.4～1.5 m、深さ 63 cm。

SX07

調査時には 2 次 B 区 SX01 としていたが、ここでは不明遺構 SX07 として報告する。長さ約 6.5 m、幅約 2.5 m、深さは約 0.15 m となる。不整形であり、風倒木痕と思われる。

出土土器（第 26 図）第 26 図は弥生時代の壺形土器と考えられる底部片である。



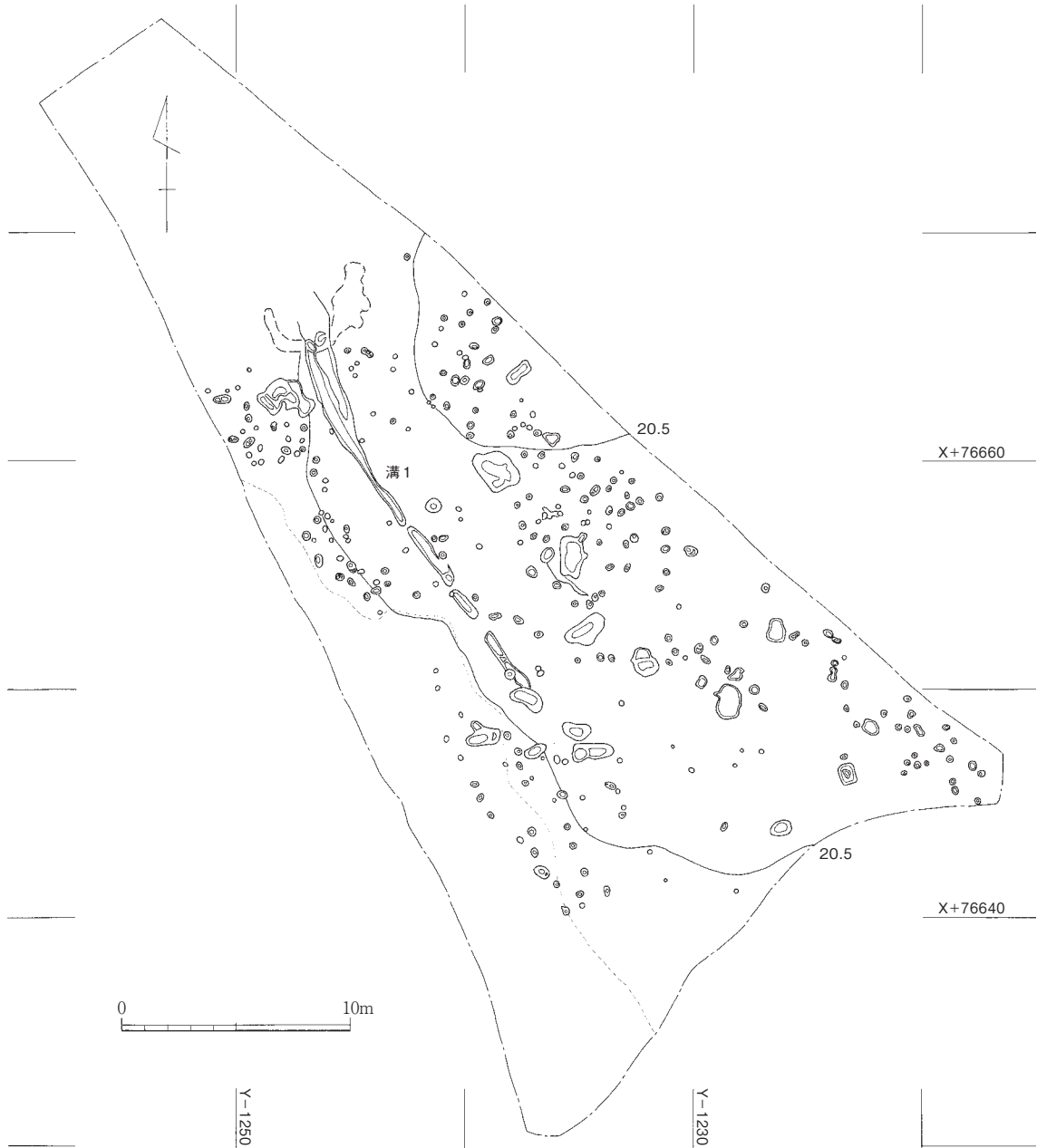
第 26 図 SX07
出土遺物実測図
(1/4)

その他の遺物（第 23 図）

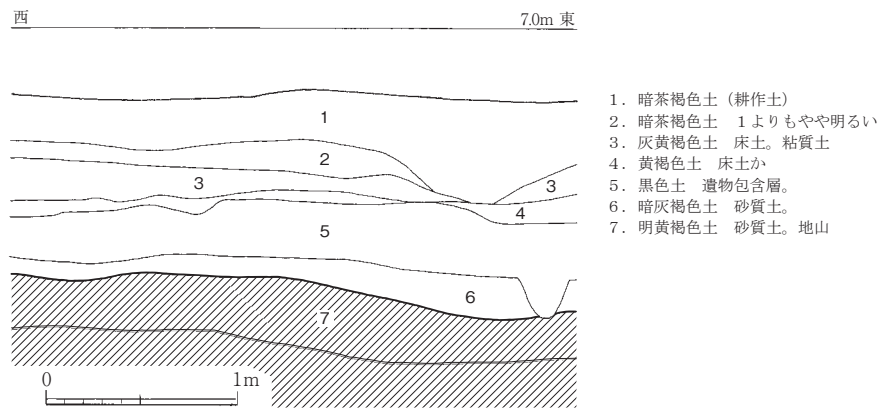
1 は 1 A 調査区南壁付近で出土した縄文土器深鉢片である。外面に条痕調整の痕跡が残る。2 は 1 D 区 SX06 から出土した弥生土器口縁部片である。鉢形土器の可能性はある。3 は 1 B 区の pit 16 から出土した弥生土器甕口縁部片である。砲弾形の器形と如意状口縁をもつものとの折衷型であろう。pit 16 は 15 号溝状遺構を切って掘られた柱穴で、本来は 15 号溝状遺構に帰属するものであろう。5 は 1 C 区 pit 28 から出土した土師器甕口縁部片である。7 は 1 C 区 pit 29 から出土した弥生土器甕底部片である。8 は 1 C 区 pit 27 から出土した須恵器蓋坏片である。12 は 1 C 区 pit 22 から出土した須恵器蓋坏口縁部片である。古墳時代後期のものである。

4) 3 区の調査

1 区・2 区の南 80 m に位置し、農道泉 7 号線に隣接する。調査区は約 1100 m² で、南北に細長い。地表下約 80 cm の明黄褐色土で遺構が確認でき、調査区南東では地山は礫層である。西から北は黒色土の粘土があり、ここから地形が緩やかに下降しているようである。ここでは溝 1 条、ピット多数を検出しているが、遺構に伴う遺物は乏しい。調査区南壁において堆積状況（第 28 図）を確認した。1 層から 4 層は現在の水田耕作土の堆積である。5 層では黒褐色砂質土が堆積し、遺物



第27図 3区遺構配置図 (1/300)



第28図 3区南壁土層実測図 (1/40)

を包含している。6層は暗灰黄色砂質土で、この層まで掘削すると遺構が明瞭となり、7層の明黄褐色土が遺構検出面となる。調査区の南東、南西端では6層で礫層となる。試掘結果からこの調査区の周囲では遺構・遺物は確認されておらず、1区・2区と比較して遺構が希薄である。地山が粘質土や礫となるため、河床もしくは河の影響を受けた可能性があり、集落の外れであったことも考えられる。

溝状遺構

南北に伸びる溝状遺構を1条検出した。長さ29m、最大幅約1.2m、深さ約0.04mと非常に浅く、検出の段階で消失する箇所もあった。埋土は暗灰黄色土で、弥生土器が出土している。南では途切れてしまうが、北では黒色粘土へ向かって自然と消滅している。自然流路の可能性もある。

出土遺物 北側から弥生土器が出土しているが小片であり、図化に堪えない。

その他の遺構

一見土坑と思われる長楕円形の黒色の遺構を検出したが、掘削するとバックホーのものと思われる爪の跡が見られたため、攪乱と判断した。調査区内に同規模の類似したものが数箇所確認できたが、同様の攪乱と思われる。また、ピットを検出したが建物を想定できるものはなかった。

5) 小 結

以上が2カ年にわたって実施した草場角名遺跡の報告である。時期ごとに若干の整理を試みる。

旧石器・縄文時代

北西に隣接する鬼熊遺跡では、後期旧石器時代から縄文早期にかけての石器などが出土していて、今回もそうした遺物の出土が期待されたが確認されなかった。比較的安定した風化ローム層起源と考えられる低位段丘上部堆積物がすでに削平され、より下位の礫層・礫混じり砂層が露出している部分が多かったためであろう。今回の調査では、1A区で縄文後期から晩期に属する土器片が少量出土した。遺物量からみて、安定的に集落を形成するようなものではなかったのであろう。

弥生時代から古墳時代

1区15号溝状遺構や18号土坑が弥生時代前期後半～末に該当する。1・2区の土坑は無遺物で帰属時期が不明だが、今回調査で出土した遺物の9割以上が弥生時代前期のものであることを考えれば、これらの遺構もこの時期と考えられる。15号溝状遺構は旧地形に沿って形成された灌漑用の水路の可能性があり、微高地周辺の開析谷または旧河道跡を利用した小規模な水田が営まれていたのであろう。

古代から中世以降

古代と考えられる土器片が出土しているが、詳細は不明である。中世に属する遺物も同様に少量の陶器などが出土した。弥生時代の遺構とは明らかに異なる埋土の柱穴が存在し、この時期に属するものがあると考えられる。

IV. 終わりに

以上が竹並大内田遺跡、草場角名遺跡の調査内容である。「豊前国府関連の重要遺跡が発見されたならば・・・」という心配は杞憂に終わった。さて、いずれも遺跡としては遺構・遺物ともに希薄であったが、前者では弥生時代前期の貯蔵穴1基と中世前期の溝状遺構、後者では主として弥生前期の土坑・溝状遺構が主要なものであった。この2遺跡の間は平成3年度に圃場整備事業によって、そして同21年度にはこの東九州自動車道建設に先立って行橋市教育委員会による調査がなされ、報告書が刊行されている。それらを踏まえて、以下で若干のまとめを行うこととする。

縄文時代以前

鬼熊遺跡では、第1次調査で珪質岩製ナイフ形石器や石核、第2次調査で旧石器時代後期～縄文早期と考えられている安山岩製剥片・姫島産黒曜石製細石刃や槍先形尖頭器（ガラス質安山岩？）などが出土していて、今回の竹並大内田遺跡でも同様の時期と思われる資料を追加することができた。行橋市周辺の山岳は多くが花崗岩に由来するバイラン土からなっていて、洞窟はカルスト地形の平尾台や火山性の英彦山周辺の山岳に限られている。竹並・草場の周辺では、古墳の下層などを注意深く調査することでより良好な資料を得る可能性があるが、今後の課題である。

弥生時代

弥生時代の遺構としては両遺跡で貯蔵穴数基、溝状遺構などを調査した。鬼熊遺跡第1次調査では多くの貯蔵穴や竪穴住居跡が残っていたが、その地点は明らかな高台で、標高19m前後の畑地であった。同第2次調査は東九州自動車道建設に先立って、第1次調査区を含む延長340mを対象地として実施され、疎らではあるがほぼ全域で弥生前期後半の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。ただ、竪穴住居跡はいずれも円形に並ぶ柱穴列で、壁体も炉跡も残らないほどに大きく削平されたものであった。第1次調査地のすぐ横の第2次調査地の標高は18mほどで、ほぼ1m低くなっていた。この第2次調査地北西端付近の標高は16.5mで、竹並大内田遺跡の貯蔵穴の標高が15.8mである。その間は試掘調査の結果、遺構がないとして調査を実施していないが、試掘調査の所見では標高16m強で黄褐色地山土が現れるということであり、遺構面は鬼熊遺跡から北西へ向かって緩く下降しているものと思われる。

幅60mに及ぶ大規模なトレンチを開けることとなったこの東九州自動車道の調査では、江尻川から南東へ向かってほぼ600mの間（草場角名遺跡1区）、部分的な空白地を含むとはいえ、弥生時代前期後半の集落が広がっていたということになる。弥生時代の遺跡はさらに展開し、みやこ町総社地区で円形住居跡や貯蔵穴からなる中期の集落が調査^{註1}されており、また、このたびの東九州自動車道建設に伴う調査でも、みやこ町八反田遺跡（国作）・同京ヶ辻遺跡（有久）で重要な発見が相次いでいる（未報告）。こうした状況から見て、祓川と今川に挟まれた低丘陵、扇状地上は河道跡などの一部を除いてほぼ全面に遺跡が展開していたものと思われる。

古代～中世

竹並大内田遺跡のすぐ西を北流する江尻川のさらに西には竹並遺跡に連なる低丘陵と、低台地が北へ延びている。江尻川はそれと本遺跡が立地する低台地の間を流れるしかなく、3号溝状遺構の西1mあまりで検出した砂礫層はその痕跡であろう。黄褐色土に直線的に掘り込まれた3号溝状遺構の床に多く貼り付いた礫層も江尻川に由来するものでであろう。礫層は北側で厚くなって遺構の肩も曖昧となることから、この氾濫によって機能を失ったものと思われる。出土した遺物のほとんどは礫の上位の堆積層から出土したもので、溝廃絶後の遺物といえることができる。

さて、この溝は磁北に対して約50度東へ振れている。この遺跡が所在する地域は国作条里跡として登録されていて、行橋市・みやこ町で刊行された遺跡等分布地図ではいずれも座標北から東へ31～32度振れて復元されている(第5図)。座標北と磁北の差を考慮しても、3号溝状遺構と条里方位の間にはなお10度あまりの開きがあって、合致しない。当地の条里地割はみやこ町の豊前国府跡の南西隅をかすめるように復元された古代官道に規定されたと考えられていて、官道の敷設は築上郡上毛町大ノ瀬官衙遺跡の外郭線に沿うことなどから8世紀前半には完成していたとされる。官道と竹並大内田遺跡の間の最短距離は1.4kmほどであるが、少なくとも12世紀頃までは現在のような形での条里地割はこの地に及んでいなかったといえよう。

しかし、調査結果からいえば弥生前期から後の土地利用を示す遺構もまったくないといってもよい状況であり、水田化した時期を求めることは困難である。周辺の調査の進展に期待したい。

付記 筆者に草場(南泉7丁目)在住で稲作を行っている友人がいる。氏によれば、祓川と長養・釜割池の中間辺りから東は祓川、西は両池の水を水田に使用しているとのことである。また、みやこ町歴史民俗博物館川本英紀氏によれば、記録はないがこれらの池は17世紀以降の築堤になるのではないかと、との話である。となれば池掛かりの水田は江戸期以降の成立となる。

註1 豊津町教育委員会「豊前国府跡惣社地区Ⅰ」(『豊津町文化財調査報告書』第23集、2000)



第29図 国作条里地割と竹並大内田遺跡(第5図参照)

圖 版

図版 1
竹並大内田遺跡

1. 全景
(北西から)



2. 北半全景
(西から)



3. 1号溝状遺構
周辺(南から)





1. 南東部全景
(西から)



2. 南東部全景
(北から)



3. 南東部全景
(南東から)

図版3
竹並大内田遺跡

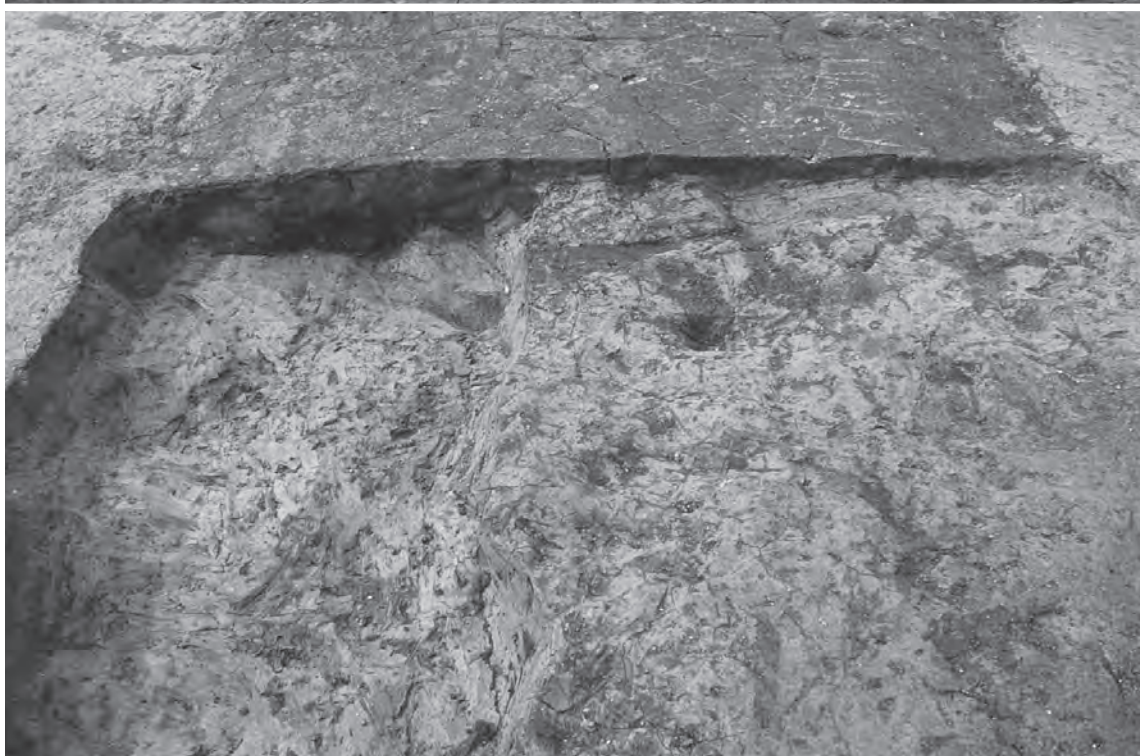
1. 1号土坑
(北西から)



2. 1号溝状遺構
(南東から)



3. 1号溝状遺構
土層(南東から)



図版 4
竹並大内田遺跡



1. 3号溝状遺構
(西から)



2. 3号溝状遺構
(南西から)



3. 3号溝状遺構土層
(南東から)

図版5
竹並大内田遺跡

1. 3号溝状遺構
土器出状態
(西から)

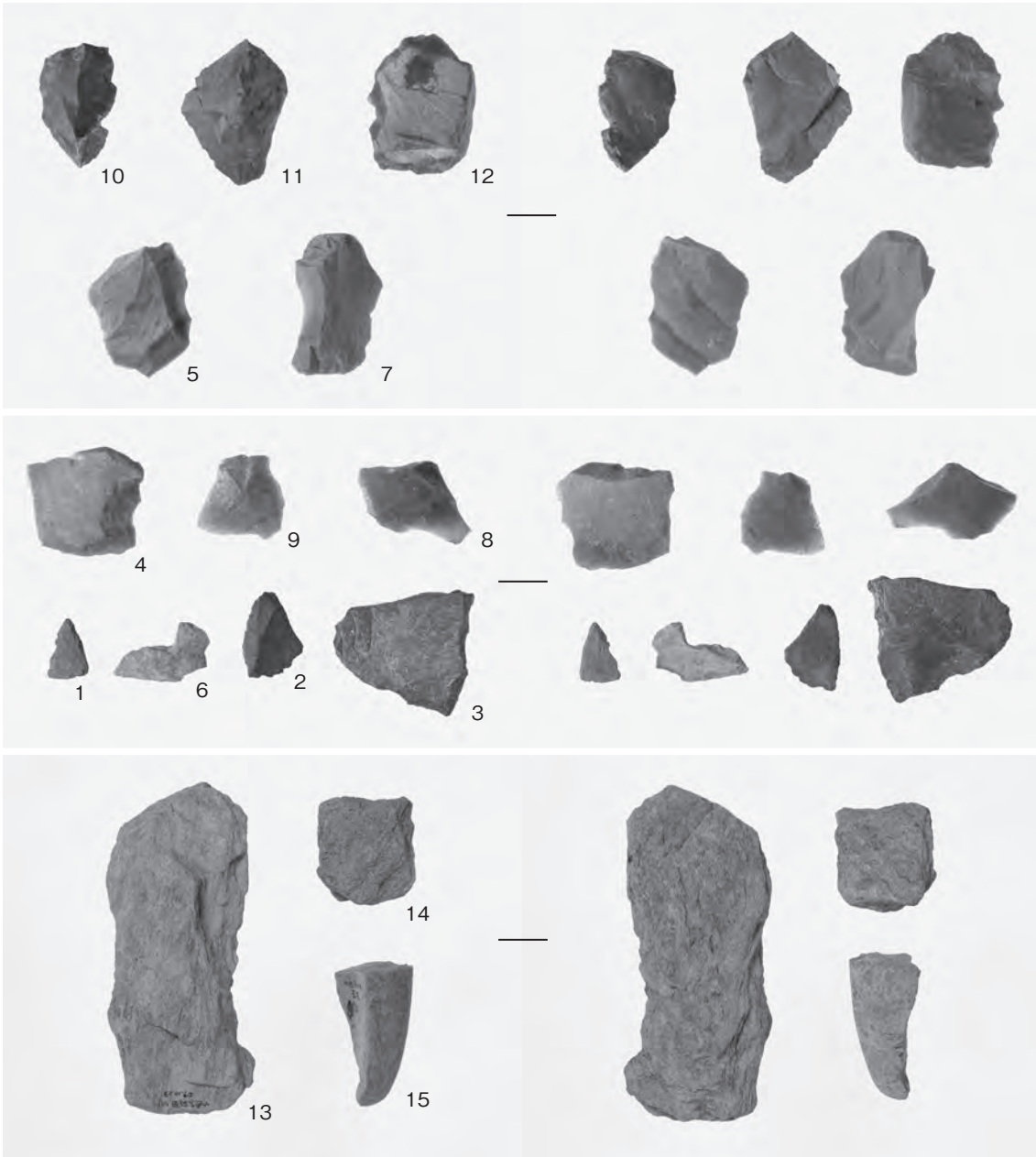


2. 4号溝状遺構
(東から)



3. 風倒木根土層
(北東から)





竹並大内田遺跡出土遺物

図版7
草場角名遺跡

1. 1A区全景
(上空から)



2. 1B区全景
(上空から)



図版8
草場角名遺跡



1. IC・D区全景
(上空から)

図版9
草場角名遺跡

1. 4号土坑土層
(南から)



2. 18号土坑遺物
出土状態
(北から)



3. 18号土坑完
掘後(北から)





1. 15号溝状遺構（南から）



2. 15号溝状遺構土層
（北から）



3. 15号溝状遺構北2区遺
物出土状態（北から）

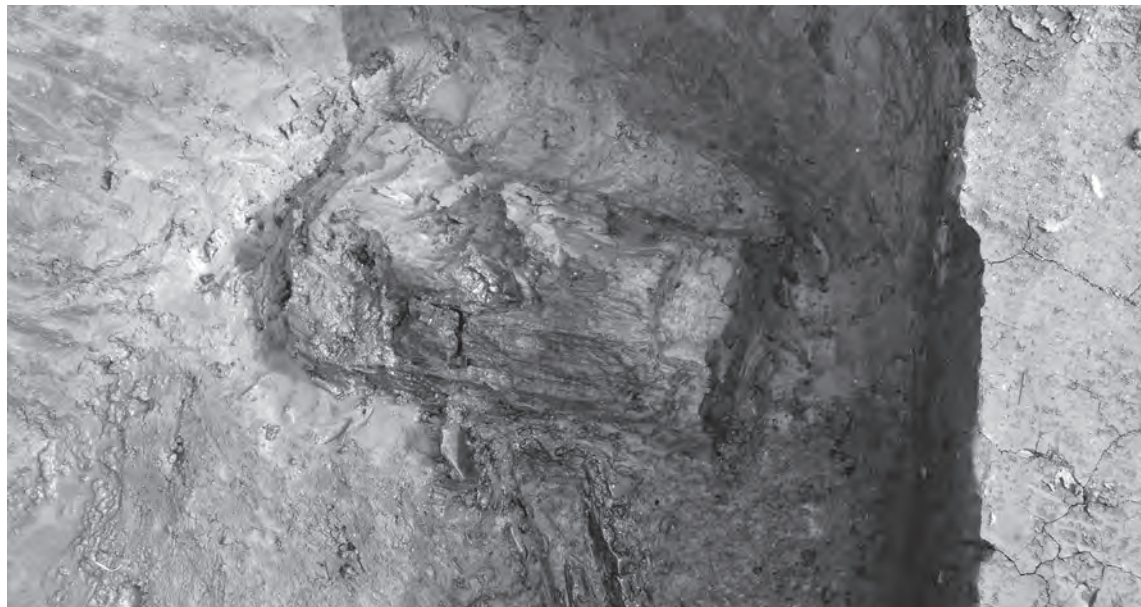
1. 15号溝状遺構
北4区遺物出土
状態（南から）



2. 15号溝状遺構
礫器出土状態
（北から）



3. 15号溝状遺構
流木出土状態
（南から）



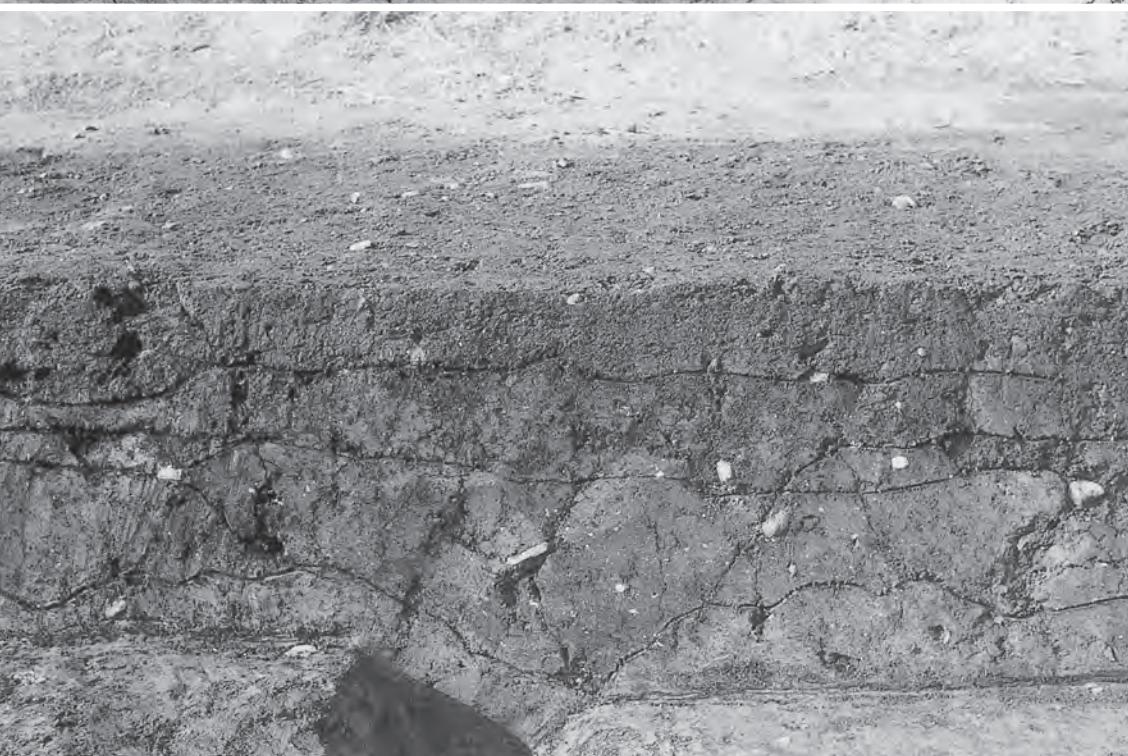
図版12
草場角名遺跡



1. 15号溝状遺構完掘後
(北から)



2. 9号溝状遺構土層
(南から)



3. 13号溝状遺構土層
(西から)

図版13
草場角名遺跡



1. 調査区西壁南
側土層(東から)



2. 2A区磨製石
斧出土状態
(北から)



第15図5



第15図4



第20図

3. 草場角名遺跡1区出土土器

図版14
草場角名遺跡



1. 2A区全景
(上空から)



2. 2B区全景
(上空から)

図版15
草場角名遺跡

1. 3区全景
(北から)



2. 3区全景
(南から)



3. 3区土層
(北から)





1. 草場角名遺跡全景
(第1次調査時、南上空から)



2. 草場角名遺跡
(2区上空から北西方向を見る)

報告書抄録

ふりがな	たけなみおおうちだいせき くさばかくみょういせき							
書名	竹並大内田遺跡 草場角名遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	飛野博文 池辺元明 宮田剛 大里弥生							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	☎838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 ☎0942-75-9575							
発行年月日	西暦 2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけなみおおうちだいせき 竹並大内田遺跡	ふくおかけんゆくほしし 福岡県行橋市 みなみいずみ 南泉5丁目507ほか	40213	14078003	33° 41' 51"	130° 58' 58"	2009.09.24 ～ 2009.12.27	6500㎡	東九州自動車道建設
くさばかくみょういせき 草場角名遺跡	ふくおかけんゆくほしし 福岡県行橋市 みなみいずみ 南泉7丁目522ほか			33° 41' 37"	130° 59' 8"	2011.01.05～ 2011.03.22 2011.06.06～ 2011.10.24	2700㎡ 4000㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
竹並大内田遺跡	散布地 集落	旧石器 弥生 中世	貯蔵穴1 溝	珪質岩製剥片 弥生土器 土器				
草場角名遺跡	集落	弥生	溝・土坑	弥生土器・石製品				
遺跡の概要								
<p>竹並大内田遺跡 江尻川という小河川に面し、鬼熊遺跡弥生集落の西端を示すものと思われる。珪質岩を用いた剥片は周辺では旧石器時代から縄文時代の古い時期に特有のものである。小型貯蔵穴1基を検出したほかは、確たる弥生時代の遺構はない。溝の中、3号溝は直線的に掘削され、12世紀頃に埋没したと考えられるが、条里地割の方位と一致しない。当地の条里制施工時期を考える上で一石を投げかける。</p>								
<p>草場角名遺跡 鬼熊遺跡を挟んで竹並大内田遺跡の南東の水田地帯に位置する。ここでも弥生時代の溝・土坑などを検出したが、開墾のためか住居跡等の主要な遺構は判然としない。また、条里地割に関わる遺構は確認できなかった。</p>								

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
24	5

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告

- 6 -

福岡県行橋市南泉所在遺跡群の調査
竹並大内田遺跡・草場角名遺跡

発行 九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3

印刷 (株)プリンティング コガ
〒831-0034 大川市大字一木 736-5